

第3章 医学部

第1節 医学部長挨拶 猪股 雅史

大分大学が創立75周年を迎えられ心よりお祝い申し上げます。これまで大分大学及び医学部の発展のためにご尽力いただきました方々に深い感謝の意を表したいと思えます。

大分大学は1949（昭和24）年に学芸学部（現在の教育学部）と経済学部からなる新制大学を礎とし、現在では5学部と5研究科を擁する総合大学となり、約600名の教員により約5,400名の学生に対し質の高い教育を提供し、優秀な人材を輩出しています。

大分大学医学部の前身である大分医科大学は1976（昭和51）年10月に誕生しました。その後2003（平成15）年に大分大学と統合し、大分大学医学部が誕生しました。2023（令和5）年4月には29年ぶりに新学科である先進医療科学科を設置し、現在医学科、看護学科、先進医療科学科の3学科で運営しています。2024（令和6）年9月には看護学科創立30周年を迎えました。また2026（令和8）年10月に大分大学医学部は前身の大分医科大学時代を含めて創立50周年を迎える予定です。

大分大学のビジョン2040は、「～次世代につなぐ、そして未来を創る～」です。医学部としては医学部ビジョン2024として、「One Team Oita 2.0～到達度に見える化から実行へ」を掲げています。

医学部の教育では2023（令和5）年の新卒学生における医師国家試験合格率が99%であり九州で第1位、全国でも第7位との結果でした。また看護師国家試験合格率も98%と良好な成績を取めました。医学科卒業生の43%、看護学科卒業生の56%が大分県の医療機関に就職するなど、大分大学ビジョン2024に掲げられている「地域貢献」を達成していると考えています。また医学科では世界医学教育連盟が示す国際基準を満たしたカリキュラム改定を行い、2023（令和5）年2月には日本医学教育評価機構（JACME）に基づく医学教育分野別評価受審にて、国際基準を満たした医学部として認定されています。また国際的大学間協定などによる国際化推進、研修医の基礎研究医プログラム設立による若手研究者育成、女性研究者の研究推進を行うなど、教育面において様々

な特色ある取組を行っています。

研究面では、本学の強みや特色を踏まえた戦略的な研究や国際的あるいは地域貢献に寄与する研究を推進しています。特にピロリ菌や狂犬病ウイルスなどの感染症研究については2021（令和3）年10月に設立されたグローバル感染症研究センターとタイアップし、更なる発展を遂げています。またAIデータサイエンスを活用した低侵襲医療機器システム開発は、国際的な研究拠点として高い評価を受けています。今後も他学部との連携により更なる質の高い研究を推進していく予定です。

大分大学医学部附属病院（旧大分医科大学医学部附属病院）は1981（昭和56）年10月1日に開院し、2021（令和3）年には40周年を迎えました。附属病院の基本理念は「患者本位の最良の医療」であり、大分県内唯一の特定機能病院として高度な医療を提供するだけでなく、県内唯一の医療機関として質の高い医療人輩出に寄与してきました。昨今の新型コロナウイルス感染症に対しても中等度以上の患者や手術を要する感染患者を積極的に受け入れてきました。また2012（平成24）年には高度救命救急センターが稼働し、大分県ドクターヘリ基地病院として大分県の地域医療を守って参りました。一方で手術室には内視鏡外科専用手術室やハイブリッド手術室、また手術支援ロボット「da Vinci」や「hinotori」を用いて、より高度かつ低侵襲な治療を大分県民に提供してきました。これらの取組は大分大学ビジョン2040に掲げられている「地域貢献」まさにそのものです。今後も医学部附属病院として大分県民の「最後の砦」として貢献していく予定です。

一方で国際感覚を有する医療人の育成も重要と考えています。医学科の教育カリキュラムは1年から6年まで通年での医学英語・医療英会話を実施しています。またASEAN諸国、サウジアラビアなど多くの海外の大学と協定を結び、人材育成及び医療協力を行うとともに、医学生及び専攻医の人事交流を行っています。

今回迎える75周年はあくまで通過点であり、今後100周年またそれ以降も更なる飛躍ができるよう、全職員がOne teamとなって取り組んでいく所存です。更なるご尽力の程、よろしくお願い申し上げます。

第2節 医学部のあゆみ

1. 医学部医学科のこれまでの歩みと今後の展望

(1) これまでの歩み

大分大学医学部は、その前身である大分医科大学が1976（昭和51）年に設立され、1978（昭和53）年に最初の学生が入学した。これは日本における医師不足と無医大県解消のための国の医師増員計画に基づいた政策であったが、当初より基礎医学系と臨床医学系ともにハイレベルの医学教育と医学研究を目指した。

1981（昭和56）年には附属病院が開院し、当初の321床から現在の618床に増床するなど、地域医療の中核としての役割を果たしてきた。特に低侵襲治療に関する多くの実績を挙げ、腹腔鏡手術や血管内治療、大動脈ステント留置術などの先端医療を幅広く導入し、また東南アジア諸国を中心にその技術の啓発活動も行っている。2023（令和5）年には新たに先進医療科学科を設置し、医学部は医学科、看護学科、先進医療科学科の3学科体制となった。

教育面では、1年次からの早期体験実習や通年で医学英語・医療英会話のカリキュラムを導入し、また地域医療実習を通じて実践的な医療教育を提供している。世界医学教育連盟の国際基準を満たす医学カリキュラムは、2023（令和5）年2月に日本医学教育評価機構（JACME）から国際基準を満たした医学部医学科として認証されている。

研究面では、ピロリ菌や狂犬病ウイルスなどの感染症研究、AIデータサイエンスを活用した低侵襲医療機器システムの開発、認知症における早期診断と治療研究、がんゲノムを起点とした臨床研究など、多岐にわたる分野で先進的な研究を推進している。さらに2021（令和3）年には「グローバル感染症研究センター」を設立し、感染症分野の研究を推進している。

(2) 今後の展望

大分大学医学部医学科は地域医療への貢献と国際的な医療人材の育成を推進する方針である。「大分大学ビジョン 2040」及び「大分大学ビジョン 2040の実現に向けたロードマップ」の方針の下、2023（令和5）年度には「医学部ビジョン2023」

を策定し、将来に向けた改革を推進している。

1) 地域医療の充実：医学部医学科の総合型選抜（地域枠）や一般入試の地元出身者枠で入学した学生を中心に、大分県の地域医療と先進医療・研究に貢献できる地域に根ざした医療人材の育成を推進する。

2) 国際交流の推進：アジアを中心に多くの海外大学との協定を結び、国際的な医療協力と人材育成を進める。さらに、インドネシアのアイランガ大学との大学院ダブルディグリー制度の導入など、国際的な視野を持つ医療人の育成に努める。

3) 先進医療の研究と提供：AI技術を活用した新たな医療機器システムの開発や、再生医療技術を用いた新規動脈グラフトの作成など、最先端の医学研究を継続的に推進する。また、地域住民との連携を深め、認知症の早期診断と治療法の開発や低侵襲手術技術の普及を図る。

4) ポストコロナ時代への対応：新型コロナウイルス感染症のパンデミックの経験を踏まえ、未来の新興感染症や再興感染症に対応できる体制を強化する。医療デジタルトランスフォーメーションにより、外来診療の効率化や患者の利便性向上を目指し、地域医療のみならず、災害時の拠点病院として最後の砦の役割を果たす。

5) 教育プログラムの充実：ORPhDプログラムや基礎研究医プログラムを通じて、研修医が早期から基礎研究を開始できる研究医育成プログラムを充実する。また、国際的な視野を持った医療人の育成を目指し、海外留学生の受入れや国際交流プログラムの強化を図る。

(3) 終わりに

大分大学医学部医学科は、その歴史と伝統を踏まえつつ、未来を見据えた教育・研究・医療活動を展開している。地域医療の充実と国際的な医療協力を両立させることで、これからも地域社会及び国際社会に貢献する役割を果たすことを目指している。医学教育と研究については、卒前・卒後教育のシームレスな連携を重視し、基礎から臨床までの幅広い知識と技術を持つ医療人を育成し続けるとともに、革新的な医療技術の研究開発を通して、国内外の医療の発展に寄与することを使命としている。今後も「患者本位の最良の医療」の理念を基に、医療と研究のさらなる発展を目指し、未来の医療を担う医師の育成を継続する。

2. 医学部看護学科のあゆみと展望

医学部看護学科は、大分医科大学が開学した18年後の1994（平成6）年4月1日に開設された。2003（平成15）年度には旧大分大学との統合により、総合大学として学生たちが学際的に学べる環境となった。実践科学としての看護学は、学際的かつ文理融合の学問分野であるため、看護学科にとって大学統合は意義のある大きな出来事であった。以下、看護学科のあゆみを紹介し、今後の展望を述べる。

（1）創設期：1994（平成6）年度～2003（平成15）年度

急速な人口高齢化や看護師不足を背景に、1992（平成4）年に「看護婦等の人材確保の促進に関する法律」が制定され、全国で看護系大学の設置が加速した。大分県においても時代のニーズに対応し得る高い資質をもつ看護専門職養成への期待が高まり、1994（平成6）年に大分医科大学医学部看護学科が誕生した。現在、全国には300もの看護系大学があるが、当時は30校であり、国立大学としても早い創設であった。開設1年目は、看護学科の校舎もなく、決して十分とはいえない環境のなか、医学科・附属病院の協力のもと、5人の教員と1期生の学生が一丸となり看護学科の基盤づくりがスタートした。1996（平成8）年度には3年次編入制度を導入し、短大や専門学校卒業者に学士課程教育の門戸を開いた。さらに、1998（平成10）年度、大学院医学系研究科修士課程看護学専攻を設置し、高度専門職業人の育成が始まった。

創設期の教育研究組織は、基礎看護学講座、臨床看護学講座、地域・老年看護学講座の3講座から成り、専門領域の教育と研究の基盤づくりに取り組んだ。特に、教育の基盤形成に向け、カリキュラムの見直し、臨地実習教育及び教育評価の体制整備に力を注いだ。

（2）基盤強化期：2004（平成16）年度～2013（平成25）年度

大学統合・国立大学法人化という大学改革のただ中において、看護学科としての使命を再認識し社会の要請にこたえる教育・研究を発展的にすすめる必要があった。看護学科は開設以来、看護師

教育と保健師教育の共通基盤を統合した看護学士課程教育により、地域のあらゆる人々の健康生活を支援する看護専門職を養成することを使命としてきた。2つの国家資格をもつ卒業生は、多様な場で、看護師あるいは保健師としての看護活動を柔軟に展開できる強みをもつ人材として、広く社会に貢献することが期待される。また、個人としてのキャリアの幅もひろがる。そこで看護学科は、統合教育の発展を目指し2009（平成21）年度、2012（平成24）年度にカリキュラム改正を行った。これを契機に2013（平成25）年度より、教育研究組織を基盤看護学講座と実践看護学講座の2講座とし、効率的、効果的な教育・研究を推進する組織改正を行った。現在、国立大学42校のうち、統合教育を維持する大学は、本学を含め6校である。

また、2007（平成19）年度より、フィリピン共和国サンラザロ病院での臨地実習プログラムが始まり、2013（平成25）年度には同国サントトマス大学との交流協定が締結され、国際交流が本格化した。

（3）教育改革期：2014（平成26）年度～2023（令和5）年度

看護学科は、2017（平成29）年のハラスメント問題、2020（令和2）年からのコロナ禍と、大きな課題に直面した。前者に対しては、学生・教員間で相互尊重のもと教育関係を結び看護学を探究する環境づくりに鋭意努力した。後者に対しては、教育の質を維持する工夫を重ね、オンライン授業やシミュレーション教育等、新たな教育方法を見出すことにつながった。

課題への取組は教育改革の推進力となり、2022（令和4）年度には、統合教育及び看護学を探究する力を育む教育の強化にむけてカリキュラムを改正した。修士課程教育では、卓越した実践力を備える専門看護師CNSの養成に力を入れ、2017（平成29）年度にがん看護CNS教育課程を更新し、2019（令和元）年度にクリティカルケア看護CNS教育課程、翌年度には老年看護CNS教育課程を立ち上げた。

（4）今後の展望～看護学科変革期～

2024（令和6）年度、看護学科は開設30周年を迎えた。卒業生・修了生は、国内外の多様な分

野・場で多彩な活躍をしており、教員として誇りに思う。こうした彼らの活躍に背中を押され、看護学科はこれから変革期へと進む。共生社会の実現、災害対応、プラネタリーヘルス等、急速に変化する社会課題に応じた新たな教育・研究を推進するために、2025（令和7）年度より2講座8領域を2講座4領域に再編し、専門領域を融合した組織を創出する。また、全学の大学院改革に伴い他学部や附属病院との協働により新たな修士課程教育を構築する。これからも学生とともに、地域とともに進化し続ける看護学科でありたい。

3. 医学部先進医療科学科

—未来の医療を創造する研究者育成—

2023（令和5）年4月に大分大学医学部に医学部としては29年ぶりに新学科、先進医療科学科が設置され、現在2年生を迎えることとなった。

現在の医療社会を支え急速に発展し続ける医療科学分野では、生命科学分野の、再生医療やゲノム技術、理工学分野のAI、ロボティクス、IoT、データサイエンスなどが急激に進歩し、臨床では革新的な医療材料や検査・治療方法、及び高度医療機器の開発の分野も拡大しており、今後の急速な医療の発展に対応できる知識と技術を持つ優れた人材が求められている。

さらに、医療社会においては医師の働き方改革、医療行為の看護師や、技師へのタスクシフト、業務拡大が推進され、医師だけではなく医療に携わる技能職においても、基礎医学・臨床医学をはじめ広い範囲の先進的領域の知識や技術の習得が求められるようになった。

このような社会のニーズ、及び医療社会の変化に対し、大分大学では将来の医療・福祉を支え、発展を担って行く人材の育成を目指した先進医療科学科を設置した。医学部の中に医学科、看護学科と並んで先進医療科学科を開設し、生命健康科学コース（定員20名）及び臨床医工学コース（定員15名）を設けた。医学科が医師を、看護学科が看護師を、言わば医療の実践者を育成するのに対し、先進医療科学科では、「未来の医療」を研究・開発できる「総合知」を持った医学・医療研究者を育成することが役割である。本学科では医学と理工学、生命科学、医療マネジメントなどの、幅広い分野の知識や技術及び研究力を修得し、リ

サーチマインド、アントレプレナーシップを持ったグローバルに活躍できる融合人材を育成する。

生命健康科学コースでは、人の生命現象、健康と疾病及び臨床検査に関する領域を中心に、臨床医工学コースでは、健康と疾病及び医工学、医療機器研究開発に関する領域を中心に学んでゆく。

生命健康科学コースでは臨床検査技師の受験資格を、臨床医工学コースでは臨床工学技士の受験資格を得ることが可能である。臨床工学技士の国家試験受験資格を得られるのは国立大学初である。

教育には、医学部内に設置した優位性を生かし、先進領域の専任教員と医学科・看護学科の兼任教員が教育に当たる。医学科の教員が講義を行うことで医学科と同等レベルの基礎医学・臨床医学を学ぶことに加え、先進領域の専任教員による医学科にも無い先端的な科目を学ぶことができる。特色ある講義科目は、2コース共通の「融合人材育成科目」である。その代表的講義が、ゲノム再生医療学、ゲノム解析学、医療とAI、医療ビッグデータ解析、人工臓器学、ロボット工学、ベンチャー起業論、医療マネジメント論等であり、医学・医療の発展を支える先進的医療科学分野である。一年次は基礎科目、融合人材育成科目群から始まるが、コースごとに特徴のある専門科目を配置し、学年ごとのカリキュラムを構成している。2年次の後半から研究室に配属しリサーチマインドを育成してゆく。またアントレプレナーシップ（起業家精神）も学ぶ。

学年が進むにしたがって、学生自らが描く自身の将来像、キャリアパスを目指して、専門分野科目、実習及び研究を履修することが可能で、学生自身で将来の活躍の場を開拓して行くことになる。

キャンパスライフは、医学科、看護学科との交流が多くある。3学科の合同講義もある。クラブ活動は医学科、看護学科と一緒にすることとなる。

卒業後の進路として、まず大学院進学がある。大学4年間で研究の方法、基礎を学び、大学院では専門領域の研究活動を継続し、エキスパートとしてのキャリアパスを形成していく。医学部の中に設置したことでいつも臨床現場と密接に関わった研究活動を続けることが可能である。その後大学及び企業の研究室に入り研究活動を続けることも可能である。製薬会社、医療機器メーカー等に就職することも可能である。就職要件に必要な国家資格を取得して医療機関に就職して臨床検査技

師、または臨床工学技士として臨床で活躍することも、もちろん考えられる。この場合も臨床現場と、研究開発の現場を行き来して、領域をつなぐ活動ができる。

いずれのコースの卒業生も、医療界に求められる新たなニーズに対応できる研究者のリーダーとして活躍してくれると期待している。

4. 沿革

1974（昭和49）年

8月1日 大分大学に国立医学教育機関創設準備室を設置

1976（昭和51）年

5月8日 国立医学教育機関創設準備室を大分大学大分医科大学創設準備室に改称

10月1日 大分医科大学開学
初代学長に中塚正行教授が就任

1978（昭和53）年

3月3・4日 第1回入学者選抜試験実施

4月1日 一般教育等の9学科目（倫理学、社会学、数学、物理学、化学、生物学、英語、ドイツ語、保健体育）、専門教育基礎医学の5講座（解剖学1、生理学1、生化学1、病理学1、薬理学）、専門教育臨床医学の3講座（内科学1、内科学2、内科学3）を開設し、8講座9学科目となった。

4月12日 第1回入学式举行



1978（昭和53）年第1回入学式

6月1日 開学記念式典举行
附属図書館開館



大分医科大学 1979（昭和54）年5月20日撮影

1979（昭和54）年

4月1日 附属病院創設準備室を設置
専門教育基礎医学の4講座（解剖学2、生理学2、生化学2、病理学2）
専門教育臨床医学の3講座（外科学1、外科学2、眼科学）を開設し、15講座となった。

1980（昭和55）年

4月1日 専門教育基礎医学の4講座（微生物学、公衆・衛生医学1、公衆・衛生医学2、法医学）、専門教育臨床医学の3講座（皮膚科学、産婦人科学、麻酔学）を開設し、22講座となった。

1981（昭和56）年

3月19日 第1回解剖体慰霊祭、慰霊碑除幕式举行

4月1日 医学部附属病院を設置（附属病院創設準備室廃止）
初代病院長 中村家政教授が就任
専門教育臨床医学の6講座（精神神経医学、小児科学、整形外科、泌尿器科学、耳鼻咽喉科学、放射線医学）を開設し、28講座となった。

10月1日 医学部附属病院開院（321床）

10月19日 医学部附属病院診療開始



1981（昭和56）年10月15日開院記念撮影

1982（昭和57）年

- 4月1日 専門教育臨床医学の2講座（脳神経外科学、臨床薬理学）を開設し、当初計画の30講座9学科目を整備した。
- 11月1日 医学部附属病院 病床の増床（計445床）
- 12月24日 第二代学長に中村家政教授が就任

1983（昭和58）年

- 5月1日 医学部附属病院 病床の増床（計604床）

1984（昭和59）年

- 3月24日 第1回卒業式挙行
- 4月1日 第二代病院長に糸賀敬教授が就任
- 4月12日 大学院医学研究科（博士課程）設置
- 4月28日 第1回大学院入学式挙行



第1回大学院入学式

1985（昭和60）年

- 4月22日 実験動物慰霊碑除幕式挙行

1986（昭和61）年

- 4月1日 第三代学長に糸賀敬教授が就任
第三代病院長に調亟治教授が就任
専門教育臨床医学の1講座（歯科口腔外科学）を設置し、31講座となった。

1987（昭和62）年

- 4月1日 医学部附属実験実習機器センター設置

1988（昭和63）年

- 3月18日 第1回学位記授与式挙行
- 6月1日 専門教育臨床医学の1講座（臨床検査医学講座）を開設し、32講座となった。

1989（昭和64）年

- 1月4日 病院総合情報システム（BUNGO）稼働開始

1989（平成元）年

- 2月1日 附属図書館学術情報システム稼働開始
- 6月28日 医学部附属病院救急部設置
- 8月1日 開学10周年記念誌「仰岳」を発刊
- 12月1日 医学部附属病院救急部（第3次救急）診療開始

1990（平成2）年

- 4月1日 医学科の入学定員を95名とした。
- 6月8日 医学部附属動物実験施設設置

1991（平成3）年

- 4月1日 医療情報部（学内措置）設置
- 10月18・19日 開院10周年記念事業を実施

1992（平成4）年

- 4月1日 第四代学長に高木良三郎教授が就任
第四代病院長に緒方二郎教授が就任
- 4月10日 医学部附属病院集中治療部設置



集中治療部内撮影

1993（平成5）年

4月1日 医学部附属病院輸血部設置

1994（平成6）年

3月31日 エイズ治療の中核拠点病院に指定
 4月1日 医学部看護学科設置
 4月22日 第1回医学部看護学科入学式挙行政
 11月1日 医学部附属病院 特定機能病院の名称承認



第1回医学部看護学科入学式

1995（平成7）年

4月1日 心臓血管外科設置（10月診療開始）
 医学情報センター（学内措置）設置
 8月1日 専門教育臨床医学の1講座（心臓血管外科学講座）を開設し、33講座となった。

1996（平成8）年

4月1日 保健管理センター設置

4月15日 病院内学級開級

1997（平成9）年

4月1日 専門教育基礎医学の1講座（感染予防医学講座）を開設し、34講座となった。

1998（平成10）年

1月1日 医学部附属病院内視鏡部（学内措置）設置
 3月24日 第1回医学部看護学科卒業式挙行政
 4月1日 第五代学長に中山巖教授が就任
 第五代病院長に茂木五郎教授が就任
 大学院医学系研究科に改称し、看護学専攻（修士課程）設置
 医学部附属病院病理部設置
 医学部附属病院内視鏡部設置
 4月22日 第1回看護学専攻（修士課程）入学式挙行政
 10月3日 開学20周年記念式典挙行政



医学部附属病院医療情報部

1999（平成11）年

4月1日 医学部附属病院医療情報部設置

2000（平成12）年

3月23日 第1回大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）学位記授与式挙行政
 4月1日 医学部附属病院総合診療部設置
 医学情報センター設置

2001（平成13）年

- 4月1日 医学部附属病院臨床薬理センター・創薬オフィス（治験管理センター）設置
医学部附属病院感染制御部設置
医学部附属病院ME機器センター設置
- 10月9日 第1回学士編入学式挙行政
- 10月20日 開院20周年記念式典挙行政



医学部附属病院臨床薬理センター・創薬オフィス（治験管理センター）

2002（平成14）年

- 4月1日 医学科講座等を8大講座に改組
医学部附属病院リハビリテーション部設置
医学部附属病院CCU部設置
医学部附属病院人工透析部設置
医学部附属病院医療安全管理部設置

2003（平成15）年

- 4月1日 医科学専攻（修士課程）設置
総合科学研究支援センター設置
医学部附属病院地域医療連携センター設置
医学部附属病院卒後臨床研修センター設置
医学部附属病院周産母子センター設置
- 10月1日 大分大学と大分医科大学の統合により大分大学医学部となる。
大分大学医学部初代医学部長に鳥巢岳彦教授が就任
大分大学医学部附属病院初代病院長に中野重行教授が就任

2004（平成16）年

- 4月1日 国立大学法人大分大学設立

- 8月23日 医学部附属病院が日本医療機能評価機構の病院機能評価認定病院となる。

2005（平成17）年

- 4月1日 第二代医学部長に葉玉哲生教授が就任
医学部附属医学教育センター設置
先端医工学研究センター設置

2006（平成18）年

- 4月1日 第二代病院長に古林秀則教授が就任
- 10月1日 医学部附属病院医療技術部設置

2007（平成19）年

- 4月1日 第三代医学部長に吉岡秀克教授が就任
- 7月2日 厚生労働省より治験中核病院に指定
- 10月17日 医学部附属病院腫瘍センター設置

2008（平成20）年

- 2月8日 都道府県がん診療連携拠点病院に指定
- 4月1日 医学部附属病院総合臨床研究センター設置
- 4月21日 肝疾患診療連携拠点病院に指定
- 5月1日 医学部附属病院救命救急センター設置
- 7月1日 医学科講座を47講座（医学基盤教育系9講座、基礎医学系14講座、臨床医学系24講座）へ再編
- 11月1日 医学部附属病院肝疾患相談センター設置
- 11月15日 医学部30周年記念式典挙行政



総合臨床研究センター開設記念式典

2009（平成21）年

- 4月1日 第四代医学部長に野口隆之教授が就任
医学部附属病院臨床栄養管理室設置
- 10月1日 総合科学研究支援センターと先端医工学研究センターを全学研究推進機構に改組

2010（平成22）年

- 2月1日 医学部附属地域医療学センター設置
- 4月1日 医学部医学科腫瘍内科学講座設置
医学部附属病院再整備推進室設置
ドクターカー導入、運用開始
- 6月9日 医学部スキルスラボセンター設置
医学部基礎医学画像センター設置
- 11月10日 医学部バイオラボセンター設置
- 12月9日 医学部附属先端分子イメージングセンター設置

2011（平成23）年

- 3月22日 医学部附属病院PET検査棟竣工
- 10月15日 医学部附属病院開院30周年記念式典挙行

2012（平成24）年

- 4月1日 第五代医学部長に大橋京一教授が就任
第三代病院長に野口隆之教授が就任
- 10月1日 学部附属病院救命救急センター棟稼働開始
(大分県ドクターヘリ基地病院)
医学部附属病院 病床の増床（計618床）



ドクターヘリ

2013（平成25）年

- 4月1日 医学科講座を再編（内科学講座及び外科学講座）
看護学科講座を再編
医学部附属病院災害対策室設置
- 4月29日 医学部附属病院 新病棟稼働開始
- 10月1日 第六代医学部長に守山正胤教授が就任
高度救命救急センターに指定



新病棟（西側）

2014（平成26）年

- 2月1日 医学部附属病院遺伝子診療室設置
- 3月26日 地域災害拠点病院に指定
- 12月1日 第四代病院長に津村弘教授が就任
- 12月24日 医学部附属病院女性医療人キャリア支援センター設置

2015（平成27）年

- 2月1日 医学部附属病院認知症先端医療推進センター設置
- 4月1日 医学部附属臨床医工学センター設置

2016（平成28）年

- 4月1日 医学科講座を47講座（基礎医学系19講座、臨床医学系28講座）へ再編
医学部医学科医療安全管理医学講座設置
- 5月25日 医学部附属病院移植・再生医療支援室設置
- 10月1日 医学部附属病院総合患者支援センター設置（地域医療連携センター廃止）

2017（平成29）年

- 2月1日 医学科講座を49講座（基礎医学系19講座、臨床医学系30講座）へ再編
医学部医学科総合診療・総合内科学講座設置
医学部医学科総合外科・地域連携学講座設置
- 4月1日 医学部附属病院クオリティマネジメント室設置
- 12月1日 第五代病院長に門田淳一教授が就任

2018（平成30）年

- 4月1日 国際教育研究推進機構（国際医療戦略研究推進センター）設置

2019（平成31）年

- 4月1日 医学科講座を48講座（基礎医学系18講座、臨床医学系30講座）へ再編
生体構造医学講座と分子解剖学講座を解剖学講座に改組

2019（令和元）年

- 10月1日 第七代医学部長に山岡吉生教授が就任
大分県難病診療連携拠点病院に指定
- 12月1日 医学部附属病院看護職キャリア開発支援センター設置

2020（令和2）年

- 4月1日 第六代病院長に三股浩光教授が就任
- 10月1日 医学部附属病院生殖医療センター設置
- 11月1日 医学部遺伝子検査ラボ設置

2021（令和3）年

- 1月25日 大分県アレルギー疾患医療拠点病院に指定
- 4月1日 医学部附属病院看護師特定行為統括センター設置
基幹災害拠点病院に指定
- 10月1日 第八代医学部長に杉尾賢二教授が就任
グローバル感染症研究センター設置
- 10月2日 医学部附属病院開院40周年記念式典挙行

2022（令和4）年

- 8月1日 医学部附属病院低侵襲手術センター設置

2023（令和5）年

- 4月1日 第九代医学部長に猪股雅史教授が就任
医学部附属病院肥満・糖尿病先進治療センター設置
医学部先進医療科学科設置
- 10月18日 大分県てんかん支援拠点病院に指定

2024（令和6）年

- 4月1日 災害マネジメント総合支援センター設置（災害対策室廃止）



医学部正門改修後（2024（令和6）年5月撮影）

第3節 教育・研究

本学部には、医学科と看護学科、先進医療科学科があり、医学、看護学、先進医療科学に関する最新の学術を教育・研究し、高度の医学、看護学及び先進医療科学の知識並びに技術と技能、そしてこれらを支える高い倫理観と豊かな教養・人間性を備えた医師或いは看護師・保健師、医療従事者等、更には医学、看護学研究者、大学・企業研究者等を養成し、これらの学問の進歩、国民の健康の維持増進、医療・保健を中心に地域や国際社会の福祉に寄与する。

また、医学科、看護学科ともにカリキュラム改革に努めている。医学科においては、医学の急速な進歩と変化する社会ニーズに対応するため、また医学教育の国際基準を満たすため、従来の学問

体系別医学教育を、教養・基礎・臨床が連携したシームレスの統合型教育カリキュラムに転換し、臨床実習をより充実させるために診療参加型実習、地域基盤型教育を推進するなど、抜本的改革を行ってきた。看護学科においては、基礎科目、専門基礎科目、専門科目の有機的統合を図るとともに、看護師教育と保健師教育との統合カリキュラムを推進し、臨床で役立つ看護教育を目指して、様々な改善を重ねている。

先進医療科学科では、先進領域融合科目群を主軸として、国際力強化科目群、未来創造キャリア・デザイン科目群、医療マネジメント科目群を配置したカリキュラムを構成し、医学・医療の基盤を支え、自然科学と社会科学の融合による「総合知」を創造し、イノベーション創出に発展させることのできる融合人材の育成を目指す。

1. 各学科の教育目的・研究目的

(1) 医学科

【教育目的】

患者の立場を理解した全人的医療ができるよう、豊かな教養と人間性、高度の学識、生涯学習能力、国際的視野を備えた人材を育成することを目的として実践的な医療教育を行う。

【研究目的】

社会の医学・医療に対する多様な要望に応えるため、生命現象の基礎的研究、及び健康の維持・増進、疾病の治療、克服に寄与する独創的、先導的研究を学内の他領域との連携で推進する。さらに、予防医学の重要性に鑑み、保健・衛生分野の研究を促進する。もって、これらの成果を地域及び国際社会に還元し、保健・医療・福祉の向上に貢献する。

(2) 看護学科

【教育目的】

人々が心身共に健康な生活を営めるよう、適切な看護を行うことができる専門的知識と技術の修得を促し、看護学の発展と保健・医療・福祉の向上、ひいては国際社会への貢献ができるよう、豊かな人間性を備えた人材を育成する。

【研究目的】

多様で複雑な国民のヘルスニーズに応え、人々が心身共に健康な生活を営めるよう、適切な看護を行うために、その基盤となる看護知識・技術や理論の検証と開発を推進する。また、実践科学としての立場から、人々とその生活に視点を当てた研究を促進し、専門的な看護実践に資することをねらいとする。もって、看護学の発展と地域住民の保健・医療・福祉の向上、ひいては国際社会へ貢献する。

(3) 先進医療科学科

【教育目的】

領域・業種の垣根を超えた情報交換と交流の橋渡しができる能力を有し、大学・企業研究者、医療従事者、起業家、医療事業マネジメントを行える人材となり、進化した医工連携、深化した医学生命科学連携の将来の担い手として活躍できる人材を育成する。

【研究目的】

医学・医療の基盤を支え、自然科学と社会科学の融合による「総合知」を創造し、イノベーション創出に発展させるため、人の生命現象、健康と疾病及び臨床検査に関する研究、健康と疾病及び医工学、医療機器研究開発に関する研究を促進し、分野横断的に橋渡しを行い「未来の医療」を創造する。もって、これらの成果を地域及び国際社会に還元し、保健・医療・福祉の向上に貢献する。

2. 医学科の教育・研究

(1) 基礎医学系講座

■解剖学講座

1) ピロリ菌感染による胃癌発生メカニズムの解明

強い発癌活性を示すことが知られているCagA毒素をもつピロリ菌感染による胃癌発生機序の解明を目指している。

2) 脂肪組織の解剖と機能・外的内的環境変化への適応獲得機構の解明

3) 生体の構造と機能に関する臨床解剖学的・分子免疫組織学的研究

1. リンパ管及び微小循環系の構造・機能と発生・新生に関する機能形態学的・分子組織化学的解析・臨床解剖学的解析

2. 腹膜播腫のリンパ行性転移機構に関する免疫組織学的解析
3. 髄液循環に関する実験的解析
4. 硬膜外リンパ系を介する生理的髄液漏出の機序解明
5. 関節・神経―骨格筋系を中心とした臨床解剖学的・生体力学的研究

■神経生理学講座

『生理活性物質の新規生理機能の解明』

本講座では、「生理活性物質の新規生理機能の解明」をメインテーマに、神経ペプチド並びにその他の生理活性物質に着目して、その新規生理機能を明らかにすることを目標としている。具体的には、目的の生理活性物質に関し、遺伝子改変技術をもとにモデル動物を作成し、行動生理学的手法やマウス・ラットへの脳室内薬物微量投与技術、分子生物学的手法を用いて解析し、その生理活性物質が関与する新規生理機能の一連の分子メカニズムを追究している。

現在、種々の摂食関連神経ペプチドに焦点を当て、CRISPR-Cas9システムを用いて新たに遺伝子欠損マウスや遺伝子改変ゼブラフィッシュを作製し、多角的な生理機能解析を行っている。これらの解析により各々のペプチドの新たな中枢性生理作用を発見しており、それらの詳細な分子メカニズムの解明に取り組んでいる。そして、得られた知見をもとに、その生理機能が関与するヒトの病態との関連性から、その関連疾患の診断や治療戦略、創薬へと繋がる研究を目指したいと考えている。

■病態生理学講座

生体の病態生理学的機能解析とその分子メカニズムの解明

循環器疾患と細胞内情報伝達機構に関するTranslational Researchを主な柱として、電気生理学的、分子生物学的及び生化学的手法を取り入れた生体の臓器、細胞、及び分子機能に関する病態生理学的研究を多面的に進めている。また循環器領域では、イオンチャネル病、心筋虚血、不整脈、糖尿病心筋症などの病態に伴う心筋の電氣的・機械的性質の異常に関する基礎的研究を行っている。更に、運動生理学、自律神経機能、血圧調節の分子機構、興奮性細胞の細胞内電解質ホメオス

ターシス機構の研究等を含めて以下の研究領域に携わっている。

- 1) 分子電気生理学的手法を用いたイオンチャネル機能の解明
- 2) 細胞内情報伝達系によるイオンチャネルの発現修飾と病態に伴う変化
- 3) 細胞内シグナル分子の発現制御に関わる転写因子研究
- 4) microRNAの心臓機能調節に関わる研究

■細胞生物学講座

本講座は、遺伝子改変技術を駆使してゼブラフィッシュ、マウス及び細胞株の遺伝子改変疾患モデルを作製・解析することにより、様々な希少難治性疾患の分子メカニズムの全容解明を目指している。大分県で発見された新たな遺伝子変異に関しても、臨床講座との共同研究により新規に遺伝子改変疾患モデルを作製して遺伝子と病態との関連性を検証している。独自の遺伝子改変疾患モデルと先進的なイメージング及び生化学的手法を駆使して病態メカニズムを明らかにし、未だ有効な治療法が確立していない希少難治性疾患の新たな診断・治療法の開発につながる研究を目指す。

■マトリックス医学講座

マトリックス生物学及び医学

動物組織は種々の細胞と細胞外マトリックスより成り立っている。これら両者の量的、質的な組み合わせにより、種々の組織が精巧に作り出されている。その中で私たちは特に細胞外マトリックスに注目し研究を行っている。その目的は1) 細胞外マトリックスに存在する分子の機能とその遺伝子調節を解析すること、2) 細胞外マトリックス分子の増加によって引き起こされる臓器線維症の機序を分子レベルで解明し、治療法に結びつけることである。特に細胞外マトリックスに最も豊富に存在するコラーゲン分子を中心に研究を行っている。

- 1) コラーゲン遺伝子の発現及び転写調節機構の解析
- 2) コラーゲン分子及びそれに由来するペプチドの機能の解析
- 3) 種々の液性因子に対するコラーゲン遺伝子の応答メカニズムの解析
- 4) 臓器線維症治療法の開発

■医学生物学講座

1. 生命科学の基礎

医学・医療を学ぶための基本となる生物の誕生と進化、生物の特徴としての細胞の成り立ちや遺伝、免疫、代謝、そしてガンなどの疾患につながる基礎的な仕組みを学ぶ。また最新の科学技術についてその概要に触れる。

2. 寄生物学及び系統分類学

原始的な六脚類を中心とした動物群の進化、生活史及び形態、発生などにもとづいた系統分類学的研究を行う。さらに生物学教育・実験に用いる新しい生物教材の開発研究も行っている。

現在の主な研究内容

1) 原始的六脚類の形態学的及び発生学的研究

2) 生物教材の開発研究

将来はモデル生物を用いた疾患研究も行う予定である。

■医化学講座

以下の3つのテーマを研究テーマとしている。

1. 生理活性化化合物の化学修飾による高機能化

酵素が行う化学修飾を利用し、生理機能物質の持つ抗アレルギー作用などの生理活性を向上させた、新規な機能性物質の創製

2. 生体触媒による有用物質の生産

培養細胞などの生体触媒を利用した、有用物質の原料となるキラルシントンの合成

3. 植物培養細胞による環境浄化

植物培養細胞が行う変換反応を利用した、環境汚染物質の浄化

■生物物理学講座

1. バイズ統計を用いた予後予測手法の開発

様々な病気について、検査結果から悪性度や今後の進行を、バイズ統計を用いて確率分布として導き出し、各患者の実情と照らし合わせて治療指針を検討できるシステムを開発する。さらに、ベイジアンネットワークを用いて各種臨床検査データ間の因果関係を明らかにし、項目ごとの重要度を明確にする方法を開発する。

2. 巨大分子に対するシミュレーション手法の開発、及びDNA分子への応用の研究

巨大分子のMCシミュレーションでは、協働運動モードのサンプリングを行うことにより、状態探索の効率化が期待される。この目的のため、自己学習型のMC法を開発し、DNAに応用する。

め、自己学習型のMC法を開発し、DNAに応用する。

3. 医学系物理学実習における新しい実験課題の開発

医学教育での物理学実習において医学と関連の深い新しい実験課題の開発を行う。

■分子病理学講座

悪性腫瘍の発症と進展に関わる分子機構の解明症例研究を基盤とし、悪性腫瘍の発症と進展の分子機構を解明し、新しい診断法や治療法の開発につながる病因因子を特定することを研究目標とする。

1) 臓器癌の遺伝子異常の解明と責任遺伝子の同定

マイクロアレイを用いた網羅的ゲノム解析によって臓器癌組織を直接解析して、病気の責任遺伝子の同定を目指している。

2) 病因因子として同定された遺伝子の機能解析

網羅的遺伝子解析によって同定された遺伝子の機能解析を行っている。

3) 感染症と発癌の関連性の分子病理学的解析

Helicobacter pylori感染症による胃癌発癌機構の分子病理学的解析を行っている。

■微生物学講座

ウイルス感染症における宿主応答とこれに基づく治療・予防戦略の研究

1) 狂犬病感染に関する総合的研究

日本国内で数少ない狂犬病研究施設として、狂犬病の感染と発症に関わるウイルス側と宿主側応答の解明を目指す。特に中枢神経系における病原性発現機構の解析、さらにこれにもとづく生物製剤、特に有効なワクチン戦略の評価やヒト型抗体製剤の開発を目指す。

2) 新型コロナウイルス感染症に関する診断と研究

3) 新興感染症の分子疫学的研究

狂犬病ウイルス、新型コロナウイルス、デングウイルス、SFTSウイルスなどを対象とした世界規模でのウイルス感染の分子疫学的研究

4) 成人T細胞性白血病ウイルス (HTLV-1) の病原性の解析、特にNF- κ Bを介した発癌機構解明とその治療戦略

■感染予防医学講座

感染症及び炎症性疾患の分子免疫学

本研究室では、感染防御に働く免疫システムの分子基盤とその破綻による炎症・アレルギー疾患の病態を分子レベルで解明し、その成果を病気の予防や治療に結びつけることを目標にしている。具体的には、免疫機能に重要なシグナル伝達分子、細胞走化性因子、セリンプロテアーゼインヒビターなどの遺伝子改変マウスを用いて、感染時の宿主免疫応答や自己免疫疾患・炎症性疾患などの病的な免疫応答を分子レベルから個体レベルまでにわたり幅広く研究し理解することを目指している。

また、感染症の病原体、媒介動物及び伝播に関する研究も分子レベルから海外学術調査まで様々な視点から進めている。

1) シグナル伝達制御、細胞遊走、上皮バリア機能の破綻と炎症性疾患の分子免疫学的研究

炎症性腸疾患・多発性硬化症・乾癬・腫瘍免疫など

2) 病原体と宿主免疫応答の統合的研究

ウイルス感染：ジカ熱・チクングニア熱など

細菌感染：シトロバクター症など

寄生虫感染：リーシュマニア症・トキソプラズマ症・アニサキス症

■薬理学講座

本講座では、低分子量G蛋白質Rhoファミリーが関わる細胞骨格や細胞内小胞輸送の制御機構を解明し、細胞、器官、個体恒常性維持の分子基盤の理解を目指している。またその研究を通じ、Rhoファミリーの情報伝達経路と密接に関わる疾患の分子基盤の理解、さらには新たな薬物ターゲットの同定を目指す。

主な研究内容

- ・細胞骨格制御蛋白質の生理的・病態生理的役割の解析

■公衆衛生・疫学講座

本講座は、コホート研究などの疫学的なアプローチに基づき、個人の食生活習慣、あるいは社会環境の観点から生活習慣病の発症にかかる規定因子を明らかにすることを目指す。さらに、地域住民や専門職との連携・組織化を図り、生活習慣病予防と健康寿命の延伸にかかる科学的なエビデ

ンスを創出する。本講座では、とりわけ循環器疾患の疫学に焦点を置き、新たに危険因子や健康の社会的決定要因を見出し、地域の健康増進に寄与することを講座の理念とする。

主な研究内容

- 1) 循環器疾患並びに生活習慣病の疫学
- 2) 地域で暮らす高齢者の健康に関する疫学
- 3) 産業保健分野に関する実践と研究
- 4) 公衆衛生活動の実践と評価に関する研究

■環境・予防医学講座

ヘリコバクター・ピロリ（ピロリ菌）は消化性潰瘍や、胃癌の原因と考えられているが、感染者すべてがこれらの疾患に罹患するわけではない。本講座ではこれらの謎を解明するため、ピロリ菌の病原因子に注目、すでに胃癌や胃十二指腸疾患に関与する2つの新しいピロリ菌の病原因子を発見、Outer Inflammatory Protein (OipA) 及び Duodenal Ulcer Promoting (DupA) と命名した実績がある。現在、ゲノム解析を駆使した新規ピロリ菌病原因子・抗菌薬耐性遺伝子の探求、病原因子と疾患パターンの地域性、また、胃内に存在するピロリ菌以外の細菌叢についても研究を進めている。加えて、ピロリ菌は世界各国において遺伝子型が異なり、ピロリ菌の遺伝子型を解析・分類することによって、諸民族がどのような経路をたどって移動してきたかを推測する文化人類学と融合した新たな学術領域研究にも取り組んでいる。さらに、本講座では、アジア、中米、アフリカ諸国との国際共同研究を積極的に推進し、多くの外国人留学生を受け入れている。最終目標であるピロリ菌感染症関連死の撲滅に向けて、これら国際学術ネットワークを活かした研究・教育活動を進めている。

■法医学講座

法医学領域において、常に必要とされる技術は正確な死因を追求することである。元来、遺体の解剖を主体とした死後の診断技術が進歩、開発されてきた。一方、臨床医学の現場では、CTやエコー、種々の血液マーカーの開発など、革新的な技術の進歩、発展が認められている。そこで、これら臨床医学での技術を遺体の死因診断にも応用することが求められている。

一方、遺体には種々の死後変化が存在し、これ

ら死後変化は臨床医学では認められない新たな所見となる。また、環境や死因、時間経過などによって、死後変化の種類や程度が異なるため、正確な死因の診断に大きな影響を与えている。

そこで、これら死後変化が臨床医学で使われている技術に与える影響を学び、最終的には死因の特定が実施できる技術を習得する。

■医療倫理学講座

医学科、看護学科及び先進医療科学科学生を対象に、倫理学の基礎的教育を行い、その上で応用倫理である医療倫理学及び医療コミュニケーション学の教育を行う。また、臨床における倫理的課題について自ら思考する能力の養成も教育の目標とする。大学附属病院を始め地域の医療従事者に対する臨床倫理や研究倫理の継続的な教育と実践の支援も本講座の使命である。研究活動では、医薬品と社会の望ましいあり方を検討し、医療倫理学と臨床薬理学の視点を統合するような学際領域の構築を志向する。

主な研究内容

- 1) 産業場面における労働安全衛生と医薬品使用の関係性を明らかにし、疾患を持ちながら就労を継続する労働者の支援のあり方を検討する。
- 2) 臨床研究における被験者保護のあり方や、医療や医薬品開発における市民、患者参画のあり方を検討する。

■臨床社会心理学講座

本講座では、患者中心の全人的医療の実現を目指して、以下のような研究教育を行っている。いずれも医学、医療、ケアと接点を有する、心理学の応用分野である。教育においては、心理学の基礎的な内容とともに、医学、医療、ケアに関連する問題にウエイトをおいて授業を進めている。こうした授業を通して、人間のこころや行動の理解、病者・患者の理解、対人コミュニケーションのスキル、さらに心理学や行動科学の視点や方法論などが学べるよう教授している。

主な研究内容

- 1) 対人援助職のバーンアウト予防・回復とメンタルヘルス
- 2) 職業性ストレスとメンタルヘルス
- 3) がん患者の不安・ストレスと心理的援助（サイコオンコロジー）

4) 対人コミュニケーション

■医学英語教育学講座

医学は日々進歩しており、医療従事者は常に英文で書かれた最新の治療法や医療技術を習得することが求められている。また、医療現場においても、患者や医療スタッフと英語を用いてコミュニケーションを図る機会は拡充している。本講座では、以下の3つを研究テーマとし、国際的に活躍しうる医療人の育成及びその教育方法の研究・開発を行っている。

主な研究内容

- 1) 医学英語力評価
- 2) 医学英語教材開発
- 3) 医学専門英語の研究とコミュニケーションのための医学英語教育

(2) 臨床医学系講座

■内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座

本講座は、内分泌糖尿病内科、膠原病内科、腎臓内科の3つのグループからなり、高血圧症、糖尿病、内分泌代謝疾患、膠原病、慢性腎臓病などの生活習慣病の診療とその病態生理や治療に関わる基礎研究を行っている。

1) 内分泌糖尿病

- ①原発性アルドステロン症の診療ガイドラインの検証及び心血管合併症、治療法による予後、QOLの検討
- ②高度肥満症における肥満外科手術による体組成、血圧、代謝異常、食行動、QOLの変化の検討
- ③肥満症にともなうサルコペニアの病態生理及び体重減量にともなう筋肉の変化の検討

2) 膠原病

- ①Toll様受容体に起因する炎症に対する脂質メディエーターの抑制作用の解明
- ②全身エリテマトーデス治療中における再燃リスク因子の同定
- ③TAFRO症候群の疾患活動性を反映するバイオマーカーの同定

3) 腎臓

- ①糖尿病性腎症におけるポドサイト障害：ミネラルコルチコイド受容体蛋白修飾の制御による新たな治療法の確立
- ②慢性腎臓病の病態における尿毒素とミネラル

コルチコイド受容体活性の関連の検討

- ③肥満関連腎症におけるSGLT2阻害薬のポドサイト保護効果の検討
- ④生活習慣病に関連した腎症における尿中ポドサイトmRNA排泄量の有用性の検討

■呼吸器・感染症内科学講座

本講座においては呼吸器、感染症の臨床研究及び基礎研究を行い、臨床に還元できるように以下のような研究課題に取り組んでいる。

主な研究内容

- 1) 非結核性抗酸菌の病原性と伝播性に関する研究
- 2) 高齢者肺炎の発症機序に関する研究
- 3) 緑膿菌ワクチンの研究開発
- 4) 気管支喘息・慢性閉塞性肺疾患の病態と抗炎症薬の効果に関する研究
- 5) 病原性微生物の薬剤耐性機序の解明

■神経内科学講座

本講座では、脳梗塞、てんかん、脳炎、髄膜炎などの急性期疾患から、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症、パーキンソン病、アルツハイマー病などの慢性疾患まで、様々な特徴をもった疾患を対象としている。高齢化社会に伴い問題となっている認知症においても、その適切な診断と治療に際しては神経診察が欠かせない。さらに、頭部MRI、脳血流SPECT、PET等の画像検査も鑑別診断に活用している。

主な研究内容

- 1) アルツハイマー病の根本的治療法の開発を目指した最先端基礎研究
- 2) USUKI STUDY(認知症リスク因子の探索的研究)
- 3) アルツハイマー病の超早期診断を目指したアミロイドイメージングを用いた臨床研究(Preclinical AD)
- 4) 家族性アルツハイマー病を対象とした治験：DIAN-J研究
- 5) 脳血管障害の臨床病理学的研究
- 6) 神経筋疾患の病態解明と治療法の開発
- 7) 認知機能低下をきたす神経変性疾患の病態解明と早期診断法の開発

■腫瘍・血液内科学講座

本講座は、固形がん及び各種貧血、血液悪性疾患の診断と治療を行う部門である。目標は、患者にとって最良の医療を提供すること、新しい有効な治療法を開発すること、さらに若い優秀な医師を育てこれを世に送り出すことである。

以下は、本講座の教育の指導内容と主な研究内容である。

専門医育成のための指導内容

- 1) 薬物療法（抗がん剤、分子標的薬剤・免疫療法を含む）の習得
- 2) 同種造血細胞移植療法の習得
- 3) 各治療選択法の習得
- 4) 支持療法の習得
- 5) 薬理の理解
- 6) がん臨床研究の方法論の理解と実際
- 7) 基礎的研究の計画、実施
- 8) CarT療法の習得
- 9) ゲノム医療の習得

主な研究内容

- 1) 消化器がん、原発不明がん、希少がんに対する効果的化学療法の開発
- 2) 造血細胞移植患者における移植後の種々の感染症の早期診断と治療に関する臨床研究
- 3) 遺伝子異常に基づいた新薬開発と個別化医療に関する研究

■循環器内科・臨床検査診断学講座

本講座は虚血性心疾患、高血圧症、心不全、弁膜疾患、心筋症、不整脈並びに先天性心疾患など心血管系疾患全般を対象とした診療と研究を行っている。以下、本講座の研究内容である。

主な研究内容

- 1) 術後心房細動の発症機序の解明と予防方法の探策
- 2) SGLT2阻害薬の心外膜脂肪パラクラインセクレトームプロファイルへの影響
- 3) 心房細動における心房リンパ管の役割
- 4) 心外膜脂肪による心房細動発症への関与と機序
- 5) 血糖変動による心疾患発症への関与と機序の解明
- 6) ブルガダ症候群と漏斗胸の関連
- 7) 救急搬送患者における心電図伝送システムの構築と効果

- 8) 持続性心房細動アブレーション後の再発予測における圧受容体反射の有用性検証

■消化器内科学講座

本講座は、消化器内科学、消化器内視鏡学からなる。

主な研究内容

- 1) アジアにおけるピロリ菌感染と胃癌との関連
- 2) 除菌後胃癌発生メカニズムの解明
- 3) ヘリコバクター抗体測定キットの交差反応性評価
- 4) 自己免疫性胃炎における胃発癌のリスク検討
- 5) ALD及びMASLDゼブラフィッシュモデルにおける肝細胞外ATP/adenosine動態の解明
- 6) 切除不能肝細胞癌患者に対する免疫チェックポイント阻害薬を用いた全身化学療法の後ろ向き及び前向き観察研究
- 7) ゲノム編集を用いた肝疾患モデルの作成と治療法探索
- 8) HBVによる直接的肝細胞障害メカニズムの解明
- 9) ヒト臍上皮内癌細胞由来オルガノイドを用いた新規バイオマーカーと診断法の確立
- 10) 膵癌早期診断に関する大規模臨床研究（スコアリングシステムによるリスク診断と術前細胞学的診断）
- 11) 抗プロテアーゼ分子SLPIのIBD新規治療薬及びバイオマーカーへの応用
- 12) 5-ASA不耐の発症メカニズムの解明

現在、ピロリ菌感染症は胃・十二指腸潰瘍の成因としてだけではなく、胃癌・胃MALToma・特発性血小板減少性紫斑病と関連しているとされ、さらには動脈硬化など全身疾患への関連が強く示唆されている。また、他のHelicobacter属に関する基礎的な研究からピロリ菌除菌法等の臨床的な研究、更には潰瘍性大腸炎に対する新たな治療法、カプセル内視鏡を用いた研究など幅広く基礎、臨床研究を国際的に行っている。

■総合診療・総合内科学講座

本講座は、全人的な医療の提供とそれを実践できる人材養成を理念とし、地域における医療と福祉の向上に向けた臨床研究を行っている。

主な研究内容

- 1) 高齢者特有の病態（認知症、骨粗鬆症など）

に関する臨床的研究

- 2) 認知症介護者の精神的・身体的負担に関する研究
- 3) 複数疾患を有する患者の評価と治療法の開発
- 4) 慢性呼吸器疾患の治療・ケアに関する臨床的研究
- 5) 地域包括ケアに関する研究
- 6) 総合診療教育に関する研究

■精神神経医学講座

精神疾患や精神医療に対する偏見はいまだ根深いものがあり、精神疾患の早期介入における大きな支障となっている。精神疾患の病因を解明し、その治療法を確立することは、患者への直接的な利益となるのみならず、このような偏見を払拭するために重要と考えられる。このような観点から、本講座においては精神疾患を心理学的・社会的・生物学的な視点から総合的に検討しつつ、脳科学としての精神医学と心の臨床科としての精神科をうまく融合させる方向で研究を行っている。

主な研究内容

- 1) 精神疾患を生活習慣の視点から捉え直す研究
- 2) リチウム療法に関する研究
- 3) 気分障害に関する研究
- 4) 不安障害に関する研究
- 5) 自殺対策に関する研究
- 6) 難治性精神疾患に関する研究

■小児科学講座

本講座は、小児期の幅広い専門領域（神経疾患、血液・腫瘍性疾患、内分泌疾患、先天代謝異常症、自己免疫・炎症性疾患、感染症、循環器疾患、腎臓疾患、未熟児・新生児疾患など）に関する臨床研究を進めている。また大分県や大分市の健診事業と協働した疫学研究を推進している。また本学医学部基礎系講座と連携し、希少遺伝性疾患の分子病態解明を目指した研究を展開し、さらに遺伝性難病に関する共同研究を進めている。

■放射線医学講座

本講座は各種疾患における超音波、CT、MRI、血管造影、核医学検査（FDG/PET-CTを含む）などの画像解析、低侵襲治療の主をなすInterventional radiology(IVR)の臨床研究及び高エネルギーX線や電子線などを用いた放射線治療の治療効

果や合併症に関与する因子の研究を行っている。

主な研究内容

- 1) 大動脈瘤の血管内治療後のエンドリークに関する画像解析
- 2) 大動脈瘤に対する新たな血管内治療の開発
- 3) 腎細胞癌に対する凍結療法の有効性と安全性に関する研究
- 4) 肺感染症のCT画像解析
- 5) 種々の腹部疾患のCT/MRI解析
- 6) 人口知能を用いた脳腫瘍の画像解析
- 7) 各腫瘍に対する放射線治療の予後に関与する因子の検討

■臨床薬理学講座

本講座は、医学部の前身である大分医科大学が開学する際に、国立大学初の臨床薬理学講座として臨床系講座に設置された伝統ある講座である。英での名称は、Department of Clinical Pharmacology and Therapeutics(CPT)であり、研究・教育・診療には、clinical pharmacology (臨床薬理学) と therapeutics (治療学) が含まれている。臨床薬理学は、一言でいえば、ヒトを対象として薬の働きを研究する学問であり、薬効やその発現メカニズム、また薬物動態や薬力学への理解を研究領域としている。治療学には、実験的な experimental therapeutics (実験的治療学) と、より応用的な applied therapeutics (応用的治療学) が含まれている。実験的治療学には、例えば治験を含む臨床試験や先進医療などがあり、応用的治療学には実臨床(診療)において実際に選択される治療の最適化、つまり集団や個別レベルでベストな治療を提供するという使命がある。本学附属病院には人を対象とした研究のため専用ユニット(CTU: クリニカルトライアルユニット)があり、医薬品開発に関わる様々な臨床試験が行われている。特に新規医薬品の第Ⅰ相試験や患者さんを対象とした Proof-of-Concept 試験(仮説検証型試験)などの早期探索的臨床試験の実施が可能である。これらの研究を通して、より良い医薬品の研究開発と高精度医療(Precision Medicine)の実現を目指している。

■消化器・小児外科学講座

本講座では、腫瘍学・浸襲学・免疫学・病理

学・生理学・分子生物学など各分野に focus を当て、実際の手術組織・培養細胞・動物モデルを用いて基礎研究を展開している。消化管・小児外科グループと肝胆膵・肥満グループの2つの柱で研究を進めている。

【各グループの具体的研究テーマ】

- 1) 腹腔鏡下手術の生体及び癌の発育・進展に及ぼす影響
- 2) 消化器癌に対する腹腔鏡下手術の根治性に関するEBMの確立
- 3) 光バイオプシー技術を用いた術中神経リアルタイム診断法の開発
- 4) 蛍光蛋白質導入レオウイルスを用いた診断治療一体型ナビゲーション手術の開発
- 5) 人工知能支援下腹腔鏡手術の術中ランドマーク教示システムの開発
- 6) 薬剤耐性ヘリコバクターピロリ菌に対する実用可能な新規光線療法の開発
- 7) 腸内細菌叢解析に基づいた大腸癌術後合併症のリスクの因子解析と予防法開発
- 8) 肝胆膵領域における α リポ酸誘導体の効果に関する基礎研究
- 9) 肝胆膵悪性腫瘍の分子生物学的解析と新しい治療法の開発
- 10) 肥満外科手術に関する基礎研究

■呼吸器・乳腺外科学講座

呼吸器、縦隔、胸壁及び乳腺疾患に関する臨床研究と、悪性腫瘍についてのトランスレーショナルリサーチ(橋渡し研究)を推進している。肺癌、中皮腫、乳癌などの悪性腫瘍について、癌発生と進展に関する遺伝子学的解析、標的分子解析を中心に、新たな癌治療法の確立を推進している。

A) 臨床研究

- 1) 鏡視下手術及びロボット手術に関する研究
- 2) エビデンス構築のための臨床試験の企画と推進
- 3) 肺癌及び胸膜中皮腫に対する集学的治療の確立

B) トランスレーショナルリサーチ(橋渡し研究)

- 1) 発癌に関与する標的分子の解析と分子標的治療に関する研究
- 2) 分子標的治療の耐性機序の解明
- 3) 微小癌の発生要因と予後規定因子に関する研究

4) 癌のheterogeneityの解析

5) 癌の免疫チェックポイント機構に関する研究

■心臓血管外科学講座

本講座は心臓、大血管、抹消血管疾患に対する手術を中心とした治療を実践し、その発展に寄与するべく臨床・基礎両面からの研究を行っている。弁膜症、虚血性心疾患、大動脈疾患で県内外からの豊富な症例に低侵襲化を目指す最先端技術の開発・実践し、また多くの緊急患者の受入で救急医療面でも地域医療を支えながら、学生、研修医の救急手技の教育をも行っている。具体的には狭心症の人工心肺を用いないバイパス手術、開胸を行わず大動脈瘤を治すステントグラフト治療、人工弁を用いない弁形成術、外科的不整脈治療などを他施設より高い頻度で行っている。研究においても長期使用に耐えうる補助人工心臓の開発（すでに短期使用機は市販化）、生体内組織合成によって生成したコラーゲンチューブ・シートを代替臓器として使用する研究など結果をすぐに臨床に還元できるテーマに取り組んでいる。海外研究施設との共同研究も多い。

■総合外科・地域連携学講座

近年、地域医療ビジョンの設定、病院の機能化、地域包括ケアシステムの構築、外科医の集約化が進められており、外科医に対する社会のニーズが変化している。本講座は、地域医療に従事する「総合外科医」の育成とともに、地域外科医療の安定化と質の向上を目的とした「地域連携学」という新しい学問分野を確立することを使命としている。

- 1) 外科common disease及びcommon malignanciesに対する診断と治療に関する研究と教育
- 2) 高齢者の外科的疾患に対する集学的治療の確立と安全性に関する研究
- 3) 一般的な外傷に対する外科治療の研究と教育
- 4) 外科系診療に共通する横断的外科総論の知識と技術の教育
- 5) 地域包括ケアや多職種連携における外科医の役割に関する研究と教育
- 6) 地域外科医療における社会的課題とその対策に関する研究

■脳神経外科学講座

- 1) 脳虚血・脳腫瘍の分子生物学と遺伝子治療
- 2) 神経外傷の病態解明と新しい治療法の開発
- 3) 神経機能再建（科学技術振興機構JST育成研究助成採択事業）
- 4) 生体磁気工学的脳機能イメージング法の開発
- 5) 非侵襲的熱ショックタンパク誘導による中枢神経保護
- 6) 分子脳神経外科学の基礎研究
- 7) 痛み・てんかん・パーキンソン病・意識障害の外科治療

■整形外科科学講座

- 1) 変形性関節症・関節リウマチ・脊椎疾患・骨腫瘍における骨・関節破壊の病態解明
- 2) 運動器疾患のbiomechanicsの解析
- 3) コンピューターシミュレーションや有限要素法による運動器の解析
- 4) 骨軟部腫瘍の病理組織学的・分子生物学的研究
- 5) 骨軟部腫瘍に対する標準治療の開発
- 6) 厚生労働省 特発性大腿骨頭壊死症研究班の活動
- 7) アジア人向け人工膝関節の開発
- 8) 脊椎手術や骨折等における骨癒合促進因子の検討
- 9) 骨折治癒に対する各種薬剤の影響
- 10) 同種骨移植の病理組織像と強度に関する研究

■皮膚科学講座

- 1) アトピー性皮膚炎の病態と治療について研究している。
 - ①アレルギー性炎症と皮膚バリア機能異常との相互関係
 - ②アトピー性皮膚炎の病態におけるリポセンサー異常の関与
 - ③アトピー性皮膚炎の病態におけるフィラグリン異常の役割
 - ④アトピー性皮膚炎の病態における角層pH異常の役割
- 2) 同種異系間での皮膚、脂肪、筋膜からなる複合組織移植後の免疫拒絶反応に及ぼす因子やラットを用いた顔面神経麻痺モデルの作成について研究を行っている。
- 3) 疾患iPS細胞を用いた難治性皮膚疾患の病態解

析を行い、新規治療方法の確立を目指している。

■腎泌尿器外科学講座

基礎研究では、主に尿路性器悪性腫瘍及び下部尿路機能の病態解明に関する研究を行っている。臨床研究では内視鏡手術を中心として低侵襲治療の開発を行っている。

- 1) 腎癌のゲノム異常
- 2) 前立腺癌の去勢抵抗性獲得機序
- 3) 外尿道括約筋再生療法の開発
- 4) 加齢に伴う膀胱機能異常の病態解明
- 5) 泌尿器科疾患に対する新規内視鏡手術の開発

■眼科学講座

網膜硝子体疾患、ぶどう膜炎、硝子体網膜リンパ腫、緑内障の基礎的・臨床研究を主な研究テーマとしている。現在、ヒト眼内液を用いたプロテオーム、トランスクリプトームなどによる統合OMICS解析によりえられたデータから研究を進めている。研究対象は以下のとおりである。

- 1) 糖尿病網膜症や加齢黄斑変性を代表とする難治性網膜硝子体疾患
- 2) 糖尿病網膜症やぶどう膜炎による黄斑浮腫
- 3) 硝子体網膜リンパ腫
- 4) 眼感染症網羅的PCR検査法の開発
- 5) 緑内障の病態解明、及び病態に基づいた治療法の開発

■耳鼻咽喉科学講座

本講座では鼻・中耳を含む上気道粘膜における免疫機構の解明に向けた研究を組織学的、免疫学的、分子生物学的手法を用いて行っている。

- 1) 実験中耳炎モデルを用いた中耳粘膜免疫機構の解析
- 2) 経鼻免疫による中耳炎ワクチン開発のための基礎実験
- 3) インフルエンザウイルスに対する不活化経鼻ワクチンの開発
- 4) ANCA関連血管炎性中耳炎の基礎的・臨床的研究

■産科婦人科学講座

婦人科腫瘍・内分泌学に関する基礎的・臨床的研究

- 1) 腹腔鏡手術におけるAI技術を利用した安全

性向上の研究

- 2) 子宮内膜症の病態に関する研究
- 3) 排卵・受精・着床・陣痛発来メカニズムに関する研究
- 4) Assisted reproductive technologyによる不妊治療に関する研究
- 5) 妊娠高血圧症候群の病態に関する研究

■麻酔科学講座

本講座では周術期から集中治療に至るまで、手術侵襲や全身炎症の病態解明をテーマとして幅広い臨床研究、基礎研究を行っている。

主な研究内容

- 1) 手術侵襲・敗血症・多発外傷による全身性炎症の分子生物学的研究
- 2) 電子スピン共鳴装置を用いた酸化ストレスのリアルタイム・モニタリング法の確立、治療への応用（敗血症、胎児仮死、多発外傷など）
- 3) 敗血症後認知機能障害に対する概日リズムの効果
- 4) 術中呼気揮発性代謝物のリアルタイム測定による臓器障害の早期検出
- 5) 末梢静脈、末梢動脈に関する臨床的・解剖学的研究
- 6) 各種神経ブロックにおける局所解剖学的研究及び臨床研究

■救急医学講座

救急医療、特に救命救急医療・集中治療を要する重症病態の病態解明と診断・治療に関して、幅広く研究と教育を行っている。

- 1) 内因性救急患者に対する救急医療・集中治療（心停止、ショック、脳卒中、急性冠症候群、敗血症など）
- 2) 外因性救急患者に対する救急医療・集中治療（多発外傷、広範囲熱傷、中毒など）
- 3) 敗血症性ショック、敗血症性多臓器不全の病態解明と治療法の確立
- 4) 各種臓器不全に対する人工補助療法
- 5) 災害医療・災害医学
- 6) ICT（Information and Communication Technology）を用いた、より迅速・適切な救急医療の確立

■歯科口腔外科学講座

- 1) 口腔がん：口腔扁平上皮癌の浸潤、転移機序を、がん細胞と細胞外マトリックスの相互作用、細胞接着因子と増殖因子の関わりについての研究
- 2) 口唇・口蓋裂：顎発育に影響の少ない口蓋形成術改良の研究
- 3) 口腔前癌病変：口腔白板症及び口腔扁平苔癬のがん化に関わる遺伝子群に関する研究
- 4) 顎骨再建：3次元画像による下顎骨再建の精度評価に関する研究
- 5) 顎変形症：外科矯正術後の長期的咬合安定性に関する研究

■診断病理学講座

診断病理学的手法を用いた臨床病理学的研究

日常の病理診断業務で経験した興味ある疾患の臨床病理学的研究及び病理診断に役立つ新しい方法・技術の開発を行っている。また、皮膚・唾液腺・乳腺腫瘍では、遺伝子異常と腫瘍発生・進展に関する研究も行っている。更に、迅速かつ正確な病理診断が求められる医療の中で、臨床の要求に対応できる病理医の育成も医療機関の重要な使命と考え、「病院病理医（病理専門医）の育成」を講座の目標に掲げている。

- 1) 種々の疾患の臨床病理学的研究
- 2) 新しい診断技術の開発
- 3) 皮膚腫瘍、唾液腺腫瘍、乳腺腫瘍における遺伝子異常の解析
- 4) 診断病理医の育成

■医療情報学講座

本講座は、医学・医療のあらゆる場面で活用されているICTを総合的にマネジメントする学問領域である。電子カルテの設計・運営だけでなく、下記に示すような多岐にわたる項目について、最新の知見を元に実践・研究をしている。

- 1) 病院情報管理システム（電子カルテシステム、ネットワーク）
- 2) 情報セキュリティ・個人情報保護
- 3) 医療情報連携ネットワーク（EHR、PHR、コミュニケーションアプリ）
- 4) データバックアップシステム・ビッグデータ二次利用
- 5) テレビ会議システム（遠隔医療）

- 6) 画像データ処理（fMRI、MRS、VBMなど）

■薬剤学講座

本講座では、日常の薬剤師業務より派生したClinical questionをもとに様々な医療薬学研究を基礎・臨床の両面から展開し、医療現場へフィードバックしている。特異的内因性基質を用いた肝代謝型薬剤の適正使用に関する研究や、生理活性ペプチドを指標とした薬効解析・病態評価、抗感染症薬や抗悪性腫瘍薬の薬物動態学的/薬力学的解析を中心に、個別化医療を目指した新規のエビデンス構築のための研究に積極的に取り組んでいる。

■臨床統計・データマネジメント学講座

本講座では統計学理論と応用の教育と研究及び研究支援としてデータセンター部門の業務を行っている。研究テーマとして次の3つのテーマを行っている。

- 1) 病原微生物の感染システムに関する研究
- 2) 質的変量の連関とパス解析に関する研究
- 3) スペクトル拡散通信の信号処理に関する研究

■医療安全管理医学講座

現代医療の高度化や多職種による医療の提供は、単純なエラーを引き起こしやすい状況を作り出している。こうしたエラーは時として患者に重大な影響を及ぼす危険性があり、その防止は重要である。本講座ではこうしたエラーの成因を、より科学的に検証し、その防止策を立案していくことを目的に設置された。また、医療の質向上には、院内感染対策も重要な課題である。院内における耐性菌の検出状況や耐性機序の解明、さらに抗菌薬の使用状況を解析することで、院内感染症の発生率を低下させるための研究を行っている。このような医療安全と感染制御を両輪として、より質の高い医療の提供のための教育や研究を、附属病院医療安全管理部や感染制御部と連携して行っている。

（3）寄附講座

■人工関節学講座

高齢者の大きな問題点の1つは、歩行能力（移動能力）の低下である。起立や歩行ができなくなることによって、日常生活が不自由になるだけでなく、

呼吸や循環などの内臓機能も低下する。このような点から、下肢の荷重関節（股関節や膝関節）の障害された機能を回復させることは重要である。この目的で用いられる人工関節置換術は、20世紀の後半に開発された技術であるが、昨今大きな進化を遂げている。本講座では、日本人の生活様式に適応した新規人工関節と手術機械の開発、術前手術計画の支援ツールの開発、手術手技を学ぶためのセミナーやラーニングコースの実施、人工関節置換術を中心とした診療と臨床研究を行う。

■内視鏡下心臓外科学講座

本学では低侵襲心臓手術による弁膜症手術を2013（平成25）年から導入している。近年では方法論も確立し、安定した成績が得られている。これまでは直視と内視鏡像との併用であったが本講座は更に完全内視鏡下での心臓手術の安全な導入を行う目的で開設された。また完全内視鏡下手術に必要な新たな器具の開発も同時に行っていく。

■ヘルスケアAI・データサイエンス学講座

Society5.0が目指す社会の実現には、フィジカルから得られた膨大なデータをサイバー空間でAI解析を行い、その解析データは様々な形で活用していくことが基本となる。本講座においては、電子カルテ情報・手術動画情報・医療画像情報のビッグデータを適切に取り扱い高度なAI解析を行うことにより医療に幅広く反映させるデータサイエンティストの育成を目指す。

- 1) プログラミングを含むコンピューターサイエンス
- 2) 統計概論、統計分析、機械学習
- 3) 医療ビッグデータとAI解析
- 4) 医療画像及び手術動画データ解析

■先端がん毛髪医療開発講座〔アデランス〕

本講座では、がん患者の疾病・治療関連リスク変化に注目して、抗がん剤誘発脱毛に対する抗酸化物質を中心とした新規治療開発や、抗がん剤・放射線・手術などがん治療によって生じる皮膚障害に対する治療開発など、がん患者QOL向上を目的として、基礎研究及び臨床研究を行っている。

主な研究内容

- 1) 抗がん剤誘発脱毛における研究開発
 - ①抗がん剤脱毛の病態を解明する基礎研究

- ②αリポ酸誘導体を用いた脱毛治療に関する基礎・臨床研究

- ③皮膚冷却の脱毛予防効果に関する基礎研究及び新規頭皮冷却装置の開発

- 2) がん治療誘発皮膚障害における研究開発

- ①αリポ酸誘導体を用いた皮膚障害治療に関する基礎・臨床研究

- ②化粧品療法の効果を検討する臨床研究

■高度医療人育成講座

本講座は、地域医療に貢献しつつ、ロボット支援手術やAIを用いた診療等の高度で最新の医療技術を身に付けた医師を育成することで、地域医療の活性化を図ることを目的として設置された。具体的には以下の活動を行う。

- 1) ロボット支援手術などの先進的医療を担う人材育成
- 2) AIを用いた手術支援、画像診断、医療コミュニケーションの実現のための人材育成
- 3) 医学生、研修医、専攻医への先進的医療の教育

■運動器疾患治療学講座

本学には整形外科学が既に培ってきた基礎的及び臨床的業績に加えて、症例の増加や要求される機能の高度化や多様性に対応するため、本講座は研究・教育・診療機能の充実を図る。運動器疾患に関する医療材料の開発と改良、外来での治療において今後更に期待される保存療法の開発と改良、及び術中と術後に使用される周辺機器の開発と改良を行う。これらの研究は、運動器疾患に関する治療に対して、更に効率的で有効な治療の実践を行うことが可能となり、運動器疾患に悩む患者さんの生活様式に適応し、QOLの向上に大きく寄与することが期待できる。

3. 看護学科の教育・研究

（1）基盤看護学講座

■健康科学

公衆衛生看護を実践する上で必要不可欠な知識として、保健医療福祉行政と医療統計学を学び、保健活動に応用できることを目的としている。先進国においては、細菌感染症が主な死因となっていた時代から、様々な危険因子の集積によって罹

患する慢性疾患の時代へと、疾病構造は変化してきた。このような現代社会においては、健康や病気には、生活習慣のみならず、様々な社会的要因が関係してくる。「社会・環境医学的背景からの疾病」といったテーマを中心に、研究に取り組んでいる。

■基礎看護学

看護は、人間の健康ケアであり、生命の理解と看護の実践は、相互に関連する。基礎看護学領域では、看護理論、アートでありサイエンスである看護ケアの開発や根拠の証明、看護実践の基礎としての人間関係、看護ケアと看護サービスの管理など、看護学の基礎や基礎看護学を教育や管理等の広範囲で捉え、教育及び研究に取り組んでいる。

- 1) 看護ケアの開発やエビデンスに関する研究
- 2) 看護師の臨床判断に関する研究
- 3) 看護ケア教育方法や評価に関する研究
- 4) 看護師・看護管理者のキャリア開発に関する研究

■精神看護学

精神看護学では、健康な人々には、ストレスに対する対処法を身につけ精神の健康を守ることを、心を病んだ人々には社会復帰する過程において環境に適応し、日常生活が自立して行えるよう援助出来ることを目的に教育、研究を行っている。実習では、異なる精神の健康レベルや療養の場での看護として、大分大学医学部附属病院と地域で実習を行い、人々が生活をしていく中で精神の健康障害を予防し、回復・保持・増進する看護について学んでいる。

■地域看護学

地域看護学では、地域住民全体を対象とする公衆衛生看護活動を中心に、働く人々を対象とする産業看護活動、児童・生徒を対象とした学校保健活動、多様な分野における在宅看護活動の4活動領域を扱い、基礎となる理論や活動方法について教育・研究を行っている。特に地域を基盤にした看護活動の方法やその構造、ヘルスプロモーションにおける看護の機能や役割についての研究に力を入れている。

(2) 実践看護学講座

■母性看護学

母性看護学は、母子とその家族がライフサイクルを通して、より健康な生活を営むために求められるケアの質の保証・向上に向けた研究を行っている。

中でも、

- 1) ハイリスク妊婦の看護
- 2) 母子とその家族を中心とした周産期ケア・政策
- 3) 助産院における看護に取り組み、母性看護の対象理解に努め、女性とその家族が主体的に意思決定するための援助方法や教育手法を探索している。

■小児看護学

慢性疾患を有する子どもの母親の養育体験に関する研究

脳性麻痺、脳炎、ダウン症などの障害を有する児を育てることは正常児を育てる場合とは、以下のような違う状況が存在する。

- 1) 児に慢性疾患を抱えていることを親が受容する過程が存在する。
- 2) 慢性疾患を有する子どもを養育することの漠然とした不安感を親は有する。
- 3) 養育をすることによる親としての自信の獲得過程を有する。母親の養育体験を詳細に明らかにし、さらに彼女らを援助するための適切な看護介入の時期と方法を調査する。

■成人看護学

成人看護学は、成熟期にある人とその家族において、生活習慣病や悪性腫瘍・慢性疾患をかかえたり、クリティカルな状態でケアを必要とする場合や人生の終末期における健康の維持・増進・回復、そして生活の質の向上を追求している。さらに医療の進歩や社会情勢の変化にともなう、臨床看護の質向上に関する研究を進めている。

- 1) 慢性疾患患者のセルフケアと継続看護に関する研究
- 2) 周手術期や集中治療をうける高齢患者への早期回復に向けたケア及び救急搬送された患者・家族への支援に関する研究
- 3) がん患者の緩和ケアとアドバンス・ケア・プランニング（ACP）に関する研究

4) 頭痛

■老年看護学

老年看護学では、高齢者が健康を維持し、その人らしくよりよく生活するための看護アプローチ方法の追求・検証・開発を目指し、教育・研究活動を進めている。教育については、学生が高齢者・家族の個別的な看護を実践するための基本となる知識と技術の修得と自己の老年観の洞察に力点をおいている。研究に関しては、大学院生と共に老年看護の現象を客観的に分析し、看護の効果を実証する方法論を探究している。

主な研究テーマは

- 1) 一般病院における非がん後期高齢者の緩和ケアプログラムの開発
- 2) 認知症専門外来における看護実践モデルの開発
- 3) 高齢者糖尿病患者の体組成の解析
- 4) 径カテーテル大動脈弁置換術 (TAVI) 選択時のACP実践に必要な構成要素の同定
- 5) オーラルフレイル予防のプログラム開発などである。

4. 先進医療科学科の教育・研究

■生命健康科学コース

本コースでは、多領域にわたる幅広い知識と視野を持ち、未来の医学・医療の基盤を支えるイノベーションを創造できる融合人材、生命科学・医療科学の研究者の育成を目指している。そのため、バイオロジーを基礎とした、細胞内の生命現象に精通し人間の健康や疾病を深く理解するための医学的素養を修得できる教育カリキュラムを実施する。がんゲノム医療、再生医療、人工臓器など生命医科学の先進領域と臨床検査・診断の先端的な専門知識と技能を修得させ、疾病のメカニズムの探求ができ、身体機能の向上や健康増進に寄与できる能力を涵養する。さらに、AIや情報処理、医工学、医療マネジメントに関する融合領域の教育も行う。

研究面においては、染色体転座・融合遺伝子による発ガンメカニズム、平滑筋細胞に着目した血管リモデリングの分子機構、糖尿病における心疾患発生のメカニズム、運動準備・空間注意における脳機能、など生命科学の幅広い領域にわたり先

端的な研究を行っている。

■臨床医工学コース

本コースでは、健康と疾病及び医学、理工学、医療機器研究開発に関する広範な知識と技能を身につけ、それらを統合し、医学・医工学の発展及び健康寿命の延伸に活用する人材の育成を目指す。

1、2年時は、医学科と同等レベルの医学教育を受けることで医学的な素養を身につけるとともに2、3、4年時の専門分野では、医用機器学・人工臓器学などの医工学の先進領域に関する知識と最先端の生体機能代行装置の操作技術を修得する。さらに、人工知能 (AI) や情報工学、ゲノム医療、医療マネジメント、知財管理等に関する融合領域の教育を受けることで、次世代の医用機器及び人工臓器の研究・開発の第一線で活躍できる研究者・技術者の育成を目指す。

2年後期より4年の卒業研究につながるまで、将来の科学研究を担う融合人材を目指し、協調的学習環境の中で研究チームの一員として問題解決能力を高め、学修・研究意欲向上につなげるために研究室配属を行う。これにより研究の重要性、研究倫理、探究心を学ぶ。

必要な履修単位取得により臨床工学技士国家試験受験資格を得ることができる。

5. 附属センターの教育・研究

■地域医療学センター

本センターは、教育、研究及び医療提供を通して、地域医療を推進するために設置された。医学生や研修医を対象とする医学教育は、地域の自治体、診療所や病院と提携して行う。

また、当センターでは地域社会の疾病構造を明らかにし、地域に特有な病気の原因を明らかにするための研究を行う。その知見をもとに疾患を治療するのではなく、患者及びコミュニティを治療する視点で健康問題対策を講じることが出来る医師を育成する。なお、当センターは内科分野、外科分野からなり、主な特徴は以下のとおりである。

【内科分野】

- (1) 患者の苦痛を緩和するのみならず、患者と家族、そして地域社会全体における健康の増進に寄与できる、有能で思いやりのある内科医の育成
- (2) 総合診療専門医、内科専門医を目指す医学生や研修医を対象とする医学教育プログラムの実践
- (3) 臓器別専門医を目指す医学生や研修医に対するプライマリーケアの実践経験の提供
- (4) 地域の基幹病院や診療所で地域医療に従事する医師に対する専門医取得、キャリアパス形成等の様々な支援
- (5) 地域固有の健康問題や疾病構造などの地域と関連した臨床研究並びに地域医療教育を評価・発展させる方法についての研究の推進

【外科分野】

外科分野における地域医療の活性化と人材育成を目標としている。その主な業務は、

- (1) 外科系の地域医療の現状と問題点の把握
- (2) 地域基幹病院や研修病院に従事する外科系医師の確保とそのネットワークの再構築
- (3) 医学生及び臨床研修医の診療所実習教育などを通じ、将来の地域医療に従事する外科系医師の育成
- (4) 地域医療に従事している外科系医療人のキャリアパス形成などの支援・推進
- (5) 外科系の地域医療学の学問構築

■医学教育センター

本センターは、学生及び教員がより良い教育環境で学習・教育が行えることを目的として、本学医学教育システムを統括的に管理するために設置された。

- (1) 教育課程に関する事項
- (2) 全国統一共用試験（OSCE・CBT）運営
- (3) 臨床実習の改善
- (4) 授業評価
- (5) 入学者選抜の評価・改善
- (6) FDの開催運営
- (7) 卒後臨床研修教育システムへの関与等

主に上記業務を行い、医学教育センターとして本学医学教育カリキュラムの改善を実施し、幅広い医学知識と技能を有し、国民・地域及び国際的

に期待される医療人を養成することを目標としている。

■先端分子イメージングセンター

本センターは、PETを用いた診療及び研究を行う医学部附属センターとして開設された。PET診療は、「がん」や「アルツハイマー」の診断法として近年普及している。大分大学医学部附属病院では、 ^{18}F -FDG及び、 ^{11}C -メチオニンを用いたがんのPET診療を実施している。この診療は、がん診療連携拠点病院として、地域における高度医療の提供に貢献するものである。また、FDGは糖代謝を利用した診断であるが、この特性を生かした基礎研究も展開することにより、さらに高度な診断技術の開発を目指す。FDG以外のPETを用いた「臨床研究」も展開していく予定である。本附属病院の特色として、臨床試験のためのセンター（総合臨床研究センター）を有している。これを利用することで新規薬剤の開発のための「治験」が実施可能である。PETを用いた治験は、近年その有効性が注目されており、本センターでの研究成果が社会に大きく貢献するものと期待している。

■遺伝子検査ラボ

遺伝子検査ラボは2020（令和2）年11月に設置され、主に感染症の原因微生物確定を目的として、リアルタイムPCR法、次世代シーケンシング（NGS）などの最新の遺伝子解析技術を活用して（保険診療以外の研究ベースでの）病原体のゲノム検出や全ゲノム解析の受託検査を行っている。得られた結果は臨床診断や治療に活用するのみならず、臨床研究への拡大も目指している。現在大分県からのSARS-CoV-2の全ゲノム解析の委託を受け、遺伝子ラボは社会に大きく貢献している。また、先進医療の遺伝子検査支援についても行っている。

■臨床医工学センター

大分県や宮崎県の医療機器産業を活性化することを目的した『東九州メディカルバレー構想』を推進する大学の拠点として創設されたセンターで、医療機器開発拠点形成、高度人材育成の拠点形成などの事業に加え、医療機器に関する知財戦略相談やデザイン思考教育を行っている。この活動は、当初、大分県内を中心とする企業関係者を

支援する取組として始められたが、現在では九州各県や西日本地区へと広がってきている。将来的には、西日本地区の医療機器開発の拠点となることを目標にしている。本センターでは、医療機器開発に際し、本学の医療従事者や研究者と他大学の研究者や参画企業の開発担当者が一緒に研究開発をできる体制を整備してきた。さらに、開発された医療機器が、海外へ展開する際の支援業務も行っている。これまでにタイを中心とした東南アジア諸国で日本式の医療機器を取り扱う人材の育成事業などを展開してきた。本センターでは、医療機器の開発や事業展開に関して幅広い支援業務を行っている。

■スキルスラボセンター

本センターは、患者に安全で高度な医療を提供するために、シミュレーターなどの教育機器を用い、医療関係者が必要な技能を効率よく修得するために開設された。本センターでは高度患者シミュレーター、消化器・呼吸器内視鏡シミュレーター、内視鏡手術シミュレーター、血管内治療シミュレーターなどの高度シミュレーターから、心肺蘇生、静脈血採血などの基本医療手技教育機材まで多くの機材を保有し、本学医学科・看護学科学生、研修医、職員だけでなく、近隣の医療関係者や市民などにも開放し、医療レベル向上を目指している。

■基礎医学画像センター

本センターは、大分大学医学部における死亡時画像診断による死因究明、解剖学教育の支援及びその他CT装置等を利用した研究等を推進し、医学・医療の発展・向上に貢献することを目的として2010（平成22）年に設置された。業務内容として、（1）死亡時画像診断による死因究明に関する事項（2）その他CT装置等を利用した研究に関する事項等を行っている。有する機器としては、16列多列検出器型CT（MDCT）装置とC-arm型X線透視装置である。

■バイオラボセンター

本センターは、大分大学医学部に設置された生命科学系研究のため共同利用実験室であり、実験の種類に応じて5種類（分子生物学・生化学、細胞生物学、生理学、微生物学、病理学）のラボが

用意されている。実験室には各種共通機器が設置されており、利用者をハード面から支援するだけでなく、機器の操作方法の指導や生命科学研究の技術指導などのソフト面からの支援も行っている。利用は登録制で、学部学生、大学院生、研修医及び教職員のみならず、他学部や学外の研究者も利用可能となっている。

第4節 研究科

医学系研究科には、博士課程と修士課程が設置されている。博士課程は、医学専攻から成り、自立した研究者・医学教育者及び診療能力の高い臨床医の育成を目的としている。修士課程は、看護学専攻から成り、医学に関する幅広い知識と視野を備えた看護実践専門家、看護教育者等の育成を目的としている。

1. 博士課程医学専攻

【教育目的】

医学研究者・教育者及び診療能力の高い臨床医育成を主眼とし、それぞれの専攻分野について自立した研究者として活動を行うに必要な高度の研究能力とその基礎となる豊かな学識を養う。さらに、生命科学や医療・福祉などの広領域において、関連する他の研究科との連携を強化する。

博士課程は基礎研究領域、臨床研究領域及びがん研究領域から構成され、それぞれ基礎医学的、臨床医学的及び腫瘍医学的側面から研究を実施する。

（1）基礎研究領域

基礎研究領域に関する授業科目は次のとおりである。

ストレスと健康の心理行動科学、組織病理学、がんのゲノム医学、イオンチャネルの病態生理学、分子神経科学、がんの分子生物学、がんのリンパ学、分子形態学、組織形態機能学、分子細胞生物学、マトリックス生物学、遺伝子工学、分子薬理学、人間生命医学発展、分子細胞免疫学、節足動物媒介性感染症学、微生物感染免疫学、分子標的製剤学、感染症疫学、分子疫学、睡眠公衆衛生、臨床疫学、産業中毒学、遺体診断学の確立、生物物理化学、微小循環学

(2) 臨床研究領域

臨床研究領域に関する授業科目は次のとおりである。

内分泌代謝・免疫・肝臓病の分子病態医学、呼吸器内科学・感染症学の実践EBM、神経病態科学・認知症医科学、脳卒中病学、消化器感染症と発癌、消化器内視鏡学、臨床心臓病学、加齢心臓病学、外科循環制御学、循環補助治療学、脳循環代謝・神経外傷病態、機能的な精神病の生物・心理・社会学、高齢者のメンタルヘルス、臨床遺伝学、発生・発達小児科学、発達アレルギー学、眼科学・病態と治療、視機能の科学、気道粘膜免疫学、創傷診断治療学、皮膚疾患病態学、過大侵襲と酸化ストレス、急性炎症と臓器障害、運動器画像診断学、運動器疾患治療学、外科臨床診断治療学、外科分子腫瘍学、排尿機能病態学、生殖・周産期病態学、総合画像診断学、低侵襲治療学、救命救急医学、脳卒中・神経救急医学、薬物治療解析学、病態薬理遺伝制御学、創薬育薬医療コミュニケーション、摂食・嚥下機能、硬組織、医薬品適正使用、地域医療・総合診療医学

(3) がん研究領域

がん研究領域に関する授業科目は次のとおりである。

がん分子標的薬開発、がんの診断病理学、呼吸器外科腫瘍学、内視鏡外科治療学、がん放射線治療学、がん薬物療法学、緩和医療学、呼吸器腫瘍診断治療学、消化器腫瘍診断治療学、腎尿路生殖器腫瘍診断治療学、婦人科腫瘍診断治療学、乳腺腫瘍診断治療学、中枢神経腫瘍診断治療学、皮膚腫瘍診断治療学、骨軟部腫瘍診断治療学、頭頸部腫瘍診断治療学、小児血液・腫瘍学、地域・在宅医療学、臨床腫瘍治療学

(4) 理学療法研究領域

理学療法研究領域に関する授業科目は次のとおりである。

理学療法基礎科学、神経・運動器連関理学療法

(5) 全領域共通の選択必修

研究推進実践論、医療英語、医療英会話、生命倫理学、医学統計、医療情報システム学

2. 修士課程

【教育目的】

医療全般にわたって広い視野と高い見識を持ち、優れた指導力を持った教育者、研究者及び国際社会に貢献できる人材を育成する。

看護学専攻

【教育目標】

社会や保健・医療・福祉の変化を見据え、看護の質向上を実現できる実践力を養い、看護実践・看護管理・看護教育の場でリーダーシップを発揮できる高度専門職業人の養成を目指す。

看護研究コースと専門看護師コース(がん看護、クリティカルケア看護、老年看護)の2コースを開設。

※修士課程医科学専攻については、2020(令和2)年度より募集停止。

第5節 医学部附属病院

本院は1981(昭和56)年に大分医科大学医学部附属病院として開院した。

開院当初321床であった病床数も徐々に増床し、現在618床である(1981(昭和56)年10月1日 321床、1982(昭和57)年11月1日 445床、1983(昭和58)年5月1日 604床、2012(平成24)年10月1日 618床)。診療科数は開院当初16診療科であったが、現在では30診療科となり、中央診療施設等は38部署まで増え、特定機能病院に相応しい陣容を整えてきた。

<現病床数>

種 類	病床数
一般病床	588
高度救命救急センター	24
ICU(集中治療室)	8
NICU(新生児集中治療室)	6
GCU(新生児回復期治療室)	6
精神病床	30
計	618

1. 大分大学医学部附属病院20年の歩み

2004（平成16）年4月1日 国立大学法人大分大学設立に伴い、本院は国立大学法人大分大学医学部附属病院に改称される。

2006（平成18）年10月1日、医療技術部を設置し、医療技術専門職として医療技術の質の向上や高度な技術の提供、診療部門・病院管理部門との密接な協力体制が確立される。

2007（平成19）年7月2日には厚労省より治験中核病院に指定される。2008（平成20）年4月1日には総合臨床研究センターを設置し、本院における治験や臨床研究の支援体制を整える。

2008（平成20）年2月8日に都道府県がん診療連携拠点病院及びがんゲノム医療連携病院に指定される。同年10月17日腫瘍センターを設置し、標準治療の実践と効果的な治療法開発のための臨床研究を推進する体制を整える。同年、新しい肝炎総合対策が始まり、本院は4月21日肝炎患診療連携拠点病院に指定される。11月1日肝炎患相談センターを設置して、肝炎疾患相談や協力病院等との連携、医師に対する研修や講習会、県民への啓発活動を行っている。

2008（平成20）年5月1日に指定された救命救急センターは、2012（平成24）年10月1日に救命救急センター棟が新築されて、救急外来10床及び救命ICU24床で運用される。また同年より大分県ドクター・ヘリ基地病院に指定され、救命救急センター屋上にヘリポートと格納庫、管制室が設置された。ドクターヘリやドクターカーによる早期の治療開始と迅速な搬送によって、大分県全域の重症傷病者の救命率向上を目指している。2013（平成25）年には大分県唯一の高度救命救急センターに指定される。

2011（平成23）年10月15日医学部附属病院開院30周年記念式典が挙行される。

2013（平成25）年4月1日、災害対策室が本院高度救命救急センター棟に設置され、2014（平成26）年3月26日に地域災害拠点病院に、2021（令和3）年4月1日に基幹災害拠点病院に指定される。2024（令和6）年4月よりBCP部門、コーディネート部門、データマネジメント部門からなる災害マネジメント総合支援センターへ改編された。

2014（平成26）年12月24日、女性医療人のキャリア継続、復帰及びキャリアアップを支援するた

めに、女性医療人キャリア支援センターが設置される。女性医療人の出産や育児等のライフイベントに伴う課題に対し、女性支援策を構築し、女性だけでなく全医療人がキャリアを継続し、活躍できる多様性のある職場環境を目指している。

2015（平成27）年2月1日に設置された認知症先端医療推進センターは、世界最先端の認知症医療・研究や大分県の認知症医療レベルの向上、超早期診断技術及び根本的治療薬の開発を目指している。

2016（平成28）年10月1日、地域医療連携センターが総合患者支援センターに改称され、地域包括ケアシステムに対応した患者中心の医療体系の提供を目指している。本センターは外来から入院、退院、さらに在宅まで切れ目なく質の高い医療サービスを提供し、総合的な患者支援を行っている。

2017（平成29）年4月1日にクオリティマネジメント室を設置し、患者の安全と高い医療の質を維持しつつ先端医療を提供することを目的としている。高難度新規医療技術管理部門と未承認新規医薬品等管理部門、臨床指標管理部門、医療業務の質改善部門の4つの部門で運営されている。

2019（令和元）年末に中国で始まったCOVID-19感染症は瞬く間に全世界に広がってパンデミックとなり、2020（令和2）年に本邦にも波及した。本院は感染症指定医療機関ではないものの、中等症以上の症例を受け入れて対応した。感染症専門の医師や看護師を大分県下の医療機関のみならず、大阪府や兵庫県、沖縄県の医療機関や行政に派遣し、県内外でCOVID-19の対応に貢献した。

2021（令和3）年4月1日看護師特定行為統括センターを設置し、高い倫理観を有し、医療安全に配慮し、高度な臨床能力を発揮できる看護師の育成を目指している。特定行為研修を修了した特定看護師は、2024（令和6）年4月1日より始まった医師の働き方改革における、タスク・シフト及びタスク・シェアに重要な役割を果たすことが期待されている。

2021（令和3）年10月2日開院40周年記念式典が挙行される。

2022（令和4）年6月、手術用ロボットが2台体制となり、手術用ロボットの運営の効率化と医療安全管理、ロボット手術術者などの高度医療人育成を目的として同年8月1日、低侵襲手術セン

ターを開設する。

2023（令和5）年4月1日に肥満・糖尿病先進治療センターが設置される。肥満症や糖尿病治療の過程では食事、運動、行動療法、薬物療法、外科療法など様々な治療方法があり、個々の患者に

とって最良の治療を提供することを目的としている。

医学部附属病院初代病院長の中野重行名誉教授は、統合当時を以下のように振り返っている。

～大分大学医学部附属病院の初代病院長の重責を担った頃の思い出～

旧大分大学と旧大分医科大学は2003（平成15）年10月1日に統合し、旧大分医科大学医学部附属病院は大分大学医学部附属病院になった。二つの大学の統合へ向けた準備の会議は、暗くなるまで続くこともしばしばあった。統合した大分大学医学部附属病院長は、初めて医学部教授会での選挙により選出することになり、私が初代病院長の重責を担うことになった。大学の統合だけでなく、大学の法人化という激動の時期でもあった。大学病院が、従来のように、臨床教育、臨床研究、高度の医療技術を開発して提供するだけでなく、利益をあげるための経営的視点も重視されるようになったのである。

そこで、病院全体が一丸となって対応する必要を感じ、初めて副院長制を採用し、葉玉哲生教授（総務・経営担当）、犀川哲典教授（医療安全担当）、宮川勇生教授（卒後臨床研修担当）にお願いし、この難関を乗り越えることができた。

当時の思い出の中から、私の意思を反映させていただいた3つのエピソードを取り上げることにする。

1）「安心と満足の医療」と「Success zone」という職員共通の目標設定の試み：附属病院は1981（昭和56）年の開院以来、「患者本位の最良の医療」を基本理念としてきた。この理念を職員だけでなく患者さんにもわかりやすいように、「安心と満足の医療」と表現することにした。その理由は、「最良の医療」のイメージは職員の間で共有されやすいのだが、「患者本位の医療」のイメージは職員の間でばらつきが大きいように感じていたので、患者の視点に立った表現として、前者を「安心の医療」、後者を「満足の医療」とした。さらに、「安心」と「満足」の2つの軸から成る座標軸を描いて、私たちの目標とするゴールを「Success zone」と名づけて視覚化して、機会あるごとに職員に語り、目指すイメージの共有化を図るように心がけた。臓器別機能別診療科への再編成は、その延長線上にある。

2）「医療の質向上プロジェクト」として「チーム医療」の育成の支援：病院長裁量経費の一部を使って、チーム医療の課題を募集した。プロジェクトの特徴は、①患者にとって質が高く温かい最良の医療である ②複数の診療科や職種の職員がチーム医療として実施するもの ③新しい患者層の開拓になり将来的に発展性が期待できるもの ④病院経営上も採算性が期待できるものであった。選考は多職種の委員で行い、医師の評価者の数を抑えて、コメディカルスタッフが過半数を占めるように配慮した。

①患者にとっての医療の質 ②チーム医療 ③将来性・発展性 ④採算性を評価の4本柱とした。2年間にわたり採択された課題は、緩和ケア支援チーム、日帰り化学療法プロジェクト、栄養サポートチーム、地域医療の強化、退院支援システムと地域連携、褥瘡ケアチーム、フットケアチーム、性同一性障害相談外来の開設、院内保育施設（開設に向けた調査準備費）、女性専門外来の開設、難病支援外来の開設などであった。幸いにして、これらの多くはその後順調に発展したように思う。選考に際して嬉しかったのは、多職種の委員の間で評価の一致度が高かったことである。「種蒔き」のつもりで行ったプロジェクトであったが、チーム医療が育って医療の質が向上しただけでなく病院の増収にもつながり、職員の「やる気」が出たとの声が、私の退職時までに聞いたことは、何にも増して嬉しいことであった。

3）卒後臨床研修センターの新築：医師の卒後2年間の臨床研修が義務化された時期だったので、卒後臨床研修の充実を図るために、全国に先駆けて、卒後臨床研修センターを新築した。今後、わが国の高齢化とAIの進展に伴って、医学教育のあり方も当然変わるはずである。次世代を担う人材の育成は大学の使命なので、有効活用していただきたいと願っている。

（中野重行）

2. 医学部附属病院

大分大学医学部附属病院の 理念・基本方針・患者さんの権利

□理 念

本院は、

「患者本位の最良の医療」を基本理念とする。
さらに、豊かな人間性と高い倫理観を備えた医療人を育成し、先端医療の開発と安心・安全な医療の提供をととして、地域社会の福祉に貢献する。

□基本方針

本院は、

- 一 患者本位の医療を実践する。
- 一 医療の質及び安全性の向上に努める。
- 一 医学、医療の発展と地域医療の向上に寄与する。
- 一 教育、研究、研修の充実を図る。
- 一 病院の管理・運営の合理化を推進する。

□患者さんの権利

- ・個人の尊厳が尊重され、良質な医療を公平に受けることができます。
- ・病気、検査、治療などについて、十分な説明を受け、理解した後、治療方法などを自らの意思で同意又は拒否を選択することができます。
- ・自分の診療記録について、本院の規則に則って情報の提供を求めることができます。
- ・診療における個人情報を守られ、プライバシーが最大限尊重されます。
- ・教育実習及び研究の協力者となることを断ることができます。
- ・医療行為の選択にあたっては、他の医療機関を選択することができます。
- ・診断や治療法について、他の医療者の意見（セカンドオピニオン）を求めることができます。
- ・身体の不自由な方、外国人の方にも、できる限りの支援をいたします。

□こどもの患者さんの権利

この病院で医療（身体と心の健康を守るためのお手伝い）を受けるすべてのこどもたちが、当たり前にもっていて、求めることができるもの（権利）をお知らせします。

1. みなさんは、人として大切にされます。
2. みなさんは、一番よいと考えられる医療を受けることができます。
3. みなさんは、安心・安全な場所で医療を受けることができます。
4. みなさんは、大切な人と一緒に医療を受けることができます。
5. みなさんは、自分が受ける医療のことについて、わかりやすく教えてもらうことができます。
6. みなさんは、自分の気持ちを伝えたり、方法を選んだりできます。
7. みなさんは、差別や、身体と心を傷つけられることから守られます。
8. みなさんは、ほかの人に知られたくない秘密は守られます。
9. みなさんは、病院にいても遊んだり、勉強したりすることができます。
10. みなさんは、将来にわたって、身体と心の健康を支えてもらうことができます。

（1）診療科

■呼吸器・感染症内科

呼吸器感染症、肺癌、間質性肺炎、アレルギー疾患の診断、治療、研究に注力してきた。超高齢社会において呼吸器や感染症内科医として求められる人材の育成を重視し、先端医療や地域医療に貢献できるよう邁進する。

■内分泌・糖尿病内科

内分泌・糖尿病内科では、内分泌疾患や二次性高血圧症の最新の診療と研究に注力している。近年は糖尿病性腎症重症化予防外来や、肥満・糖尿病先進治療センターを設置し、他診療科や医療スタッフと連携して代謝疾患の先進的な治療を行っている。

■膠原病内科

大学病院では多臓器に病変が及ぶ重症例や難治

例など、あらゆるリウマチ性疾患の診療を行い、新たな専門医の育成にも力を注いでいる。それぞれの地域で専門医療を受けられるように、県下の広い範囲で膠原病の専門外来を行っている。

■腎臓内科

腎臓内科は、腎疾患の発症から透析期まで幅広い診療・研究を行っている。高血圧や糖尿病、膠原病など様々な全身疾患に伴い発症することも多く、「全身診ることができる腎臓内科」を目指して教育にも力を注いでいる。

■脳神経内科

脳神経内科では、臨床では、「患者さんに寄り添う医療」の実現のため他科・他病院・他職種との連携を図りながら、神経内科学の臨床をベースに「治せる脳神経内科」の基礎・臨床研究の発展を目指している。また、「分かる神経内科」を目指して教育に力を入れている。

■消化器内科

消化器内科では、消化器疾患・肝臓疾患・膵胆道疾患の消化器病全般に対しての診療・教育・研究を行っている。消化器病や肝臓病、内視鏡の専門医・指導医の育成に努め、大分県における先端医療の推進に貢献している。

■循環器内科

循環器内科では、心血管系疾患を有する患者さんの全人的医療に真摯に取り組んでいる。今後も「感謝、反省、謙虚」を言い聞かせながら、先進医療から地域医療まで広く貢献していく。

■血液内科

血液内科では造血幹細胞移植を中心とした血液疾患全般の診療を行うとともに、安全な移植治療の開発を目指した臨床研究を行っている。また専門医の育成や、大分県における血液疾患診療体制の発展に力を注いでいる。

■腫瘍内科

腫瘍内科では消化器がん（食道、胃、大腸、胆管、膵臓）、呼吸器がん（肺がんなど）、原発不明癌及び肉腫などの診断や薬物療法を主に行っている。また、治験や臨床試験など臨床研究にも力を

入れている。

■総合内科・総合診療科

2013（平成25）年に総合診療部から総合内科・総合診療科に改組となり、2017（平成29）年に講座化された。複雑で未分化な健康問題への対応を専門とし、入院症例の多くは不明熱で紹介された患者である。

■精神科

うつ病や双極性障害を中心に、外来や病棟での専門的治療のみならず、復職支援のためのプログラム（リワーク）を運営し、機能の回復と復職、再発防止を支援してきた。難治性精神疾患に対する電気けいれん療法や治療抵抗性統合失調症に対するクロザピン療法も行っている。

■小児科

小児の血液腫瘍疾患、神経疾患、内分泌代謝疾患、周産期の新生児疾患など幅広い小児診療を担当している。小児科病棟は2015（平成27）年10月に4階東病棟、外来部門は2017（平成29）年2月に外来棟1階に移動し、本学が担う高度先進医療を実践している。

■消化器外科

消化管や肝胆膵領域の悪性疾患や肥満治療などの手術療法を中心に診療を行っており、腹腔鏡下手術や縦隔鏡下手術に代表される低侵襲手術及びロボット支援手術、ナビゲーション手術などを中心に診療や研究を行っている。

■呼吸器外科

呼吸器悪性腫瘍（肺癌など）に対し、手術・薬物療法・放射線治療による集学的治療や先進医療を実践・開発している。低侵襲手術についても、2020（令和2）年よりロボット支援下手術を開始、症例数を増やしている。臨床試験や治験も積極的に実施している。

■小児外科

小児外科は、0～15歳までの小児の外科疾患に対し手術を行う診療科であり、対象が小児であるため、身体の負担を極力少なくし、手術後の子どもの成長にも配慮した低侵襲手術を第一選択に

診療を行っている。

■乳腺外科

乳腺外科は、主に乳癌を対象として診断、手術、薬物療法を行っている。また、形成外科や関連科と連携をとり、集学的治療を推進している。外科専攻医に対しては、認定医・専門医習得を目標としたプログラムを組んでいる。

■心臓血管外科

成人心臓疾患、大動脈疾患、末梢動脈疾患を中心に24時間対応で診療を行っている。循環器内科、放射線科とチームを結成、径カテーテル弁膜症治療、ステントグラフト治療など身体に優しい低侵襲治療に取り組んでいる。

■脳神経外科

すべての脳神経外科治療（脳腫瘍・脳血管障害・神経外傷・脊髄・小児・てんかん及び機能外科）を良好な成績で網羅する。安全で確実な手術のための手法は脳神経外科医の技術を好サポートし、多様な症状に対応する。

■整形外科

小児から高齢者まで全世代の運動器機能の維持・回復のため、外傷、スポーツ障害、関節や脊椎の変性疾患や腫瘍に至るまで幅広い診療を行って来た。基礎研究と伴に、先端的医療を積極的に取り入れ、人々のQOL向上を目指している。

■形成外科

形成外科は現在、幅広い形成外科領域全般の診療を行っている。特に再建手術、顔面神経麻痺、傷跡治療、血管腫・血管奇形など専門性の高い領域も、他科と協働して、高い質の医療提供を目標に活動している。

■皮膚科

悪性腫瘍、感染症、炎症性皮膚疾患（薬疹、自己免疫疾患、炎症性角化症など）の重症例に対応する体制を整備している。皮膚悪性腫瘍、アトピー性皮膚炎、円形脱毛症、皮膚アレルギーの各専門外来を開設している。

■腎臓外科・泌尿器科

泌尿生殖器腫瘍をはじめ、排尿障害、尿路結石、尿路感染症、小児及び女性泌尿器科疾患、腎不全などの多岐にわたる領域において、高度医療の実践に努めている。根治性と低侵襲性を追求した腹腔鏡手術やロボット支援手術に積極的に取り組んでいる。県内唯一の腎移植も行っている。

■眼科

高度な眼科医療に対応できる医療機器整備を行い、すべての眼科疾患に対する診療及び教育を行い、専門医の育成を行ってきた。緑内障、加齢黄斑変性、小児眼科などに対し、専門外来を確立し、先進的な医療を提供してきた。

■耳鼻咽喉科・頭頸部外科

大分県における唯一の特定機能病院における診療科として、耳鼻咽喉科医療の最終医療機関として、また耳鼻咽喉科医師常時滞在施設として、高度医療と救急医療を提供し、大分県の耳鼻咽喉科医療を支えている。

■産科婦人科

産科婦人科の10年を振り返ると、良性腫瘍や悪性腫瘍の内視鏡下手術、ハイリスク妊娠の周産期管理や高度生殖医療など、多岐にわたって診療内容の整備を行ってきた。今後は各専門領域における専門医の育成に加え、がん遺伝子パネル検査による精密医療やがん患者の妊孕性温存療法など、他科の連携を必要とする医療の推進にも貢献していきたい。

■放射線科

本科は画像診断やIVR、放射線治療を担当している。IVRでは大動脈ステント治療（心臓血管外科と共同）の他、腎細胞癌に対する凍結療法などを行っている。放射線治療では強度変調放射線治療や画像誘導放射線治療など高度な医療を提供している。

■麻酔科

新しい術式やハイリスク患者において、安全で快適な麻酔を行うだけでなく、集中治療部での重症患者の管理、及び、急性／慢性痛患者の診断や治療を行うペインクリニックなど、周術期管理の

3本柱を担い、また、術後疼痛管理チームや緩和ケア支援チームとしても積極的に活動している。

■救命救急科

2018（平成30）年2月より高度救命救急センターという中央診療施設より一つの診療科として救命救急科が設置された。これまでは病院の中央部門として運営してきたが、救急科専門医も誕生していく中で救命救急に特化した診療に大きな励みとなっている。2021（令和3）年時点で、県内の3医療施設に医局員が外向して地域医療に貢献している。

■リハビリテーション科/リハビリテーション部

2013（平成25）年に訓練室が2階新病棟へ移転した。現在総勢30名のスタッフで構成され、リハビリテーション治療は年間40,000件超となった。専門医や療法士の養成を担うとともに、各職種が研究・学会活動にも注力している。

■歯科口腔外科

本科の専門領域は口腔癌、口唇口蓋裂、顎変形症等で、それぞれの領域の専門医・指導医の育成を行っている。さらに県民への口腔がん早期発見・早期治療の啓発活動、アジア新興国での口唇口蓋裂手術支援と口腔癌共同研究などの院外活動に力を注いでいる

（2）中央診療施設等

■検査部

検査部は、検体検査部門・生理検査部門・微生物・遺伝子検査部門・採血部門の4部門が連携しながら運用している。臨床の要望に応えつつ、正確かつ迅速な検査結果の提供に努めることで、質の高い医療に寄与している。

■手術部

手術室の再開発により、ハイブリッド手術室1室を含む15室による運営となった。2019（令和元）年度の手術件数は5,910件で、その後コロナ禍の影響で減少したが、2022（令和4）年度には回復し、2023（令和5）年度には過去最高の6,464件となった。

■放射線部

放射線部は最高水準の装置を設置した9部署で構成され、各診療科のニーズに応えるべく、迅速な放射線画像診断、IVR、高精度放射線治療の提供、放射線の安全管理や研究活動を通して患者のQOL向上、医療安全の推進に取り組んでいる。

■材料部

材料部は、滅菌部門と物流部門、薬剤搬送部門の3部門で構成される。当院で使用する医療材料・器材の滅菌管理、医療現場のニーズに応える迅速な対応で、高度な先端医療を支え、医療の質の保証に取り組んでいる。

■クオリティマネジメント室

クオリティマネジメント室は、本院の医療の質向上のための教育研究診療機能の評価、監督、指導及び提言を行い、患者の安全と高い医療の質を維持しつつ先端医療を提供することを目的として2017（平成29）年4月に設置された。

■高度救命救急センター

2008（平成20）年5月に救命救急センターに指定された。2012（平成24）年10月に新築された救急専用棟にて、初期診療から集中治療まで行うと同時に大分県ドクターヘリの基地病院として運用を開始し、ドクターカーと協働しながら病院前救急診療にも積極的に取り組んでいる。さらに2013（平成25）年10月には高度救命救急センターに指定され、県内の救急診療の最後の砦としての重責を担い、緊急度・重症度の高い患者の診療にあたっている。

■集中治療部

集中治療部は、1985（昭和60）年の開設以来、麻酔科医が集中治療を担う“closed ICU”システムで運営している。治療した重症患者数は15,000例を超しており、大分県下最大規模の急性期医療の「最後の砦」として重要な役割を担っている。

■輸血部

輸血部ではすべての輸血用血液の管理、検査、供給を行うとともに、末梢血幹細胞の凍結保存や、CAR-T細胞製剤や間葉系幹細胞など細胞療法製

剤の調整・管理を行っている。安全かつ適正な輸血療法の実践に24時間体制で取り組んでいる。

■病理診断科・病理部

病理診断科・病理部では、病理専門医3名、細胞診専門医3名、臨床検査技師8名で、病理標本の作製から病理診断を行っている。組織診断、細胞診断とも全例ダブルチェックを行い、免疫染色、遺伝子変異やキメラ遺伝子の検出を取り入れ、正確な診断を心がけている。

■医療情報部

医療情報部は、安全で利便性の高い電子カルテシステムの運営を行いつつ、医療情報ネットワーク、災害時バックアップやデータ2次利用などにも力を入れている。また、最新のICTを積極的に取り入れて提供をしている。

■臨床薬理センター

特殊診療施設である臨床薬理センターは、外来診療として先進医療を含めた治験外来、薬物療法内科外来、薬物治療のみでは対応が困難な疾患(心身症外来)を行っている。また、2008(平成20)年5月に附属病院内に設立されたClinical Trial Unit (CTU)において、早期探索的臨床試験を実施し、新薬を作り出す事に力を注いでいる。

■総合患者支援センター

前身の地域医療連携センターから2016(平成28)年に総合患者支援センターに名称変更した。「受付部門」「患者サポート部門」「地域連携推進部門」の3部門を設置し、患者本位の質の高い医療サービスを提供し、総合的な患者支援を行っている。

■周産母子センター

妊娠期・分娩期の母子を集中管理する産科・母性部門と、ハイリスク新生児の集中治療を行う新生児部門から構成される。2016(平成28)年7月に病院改装後の4階西病棟に移動し、また2018(平成30)年6月には大分県から地域周産期母子医療センターの指定を受けた。2019(平成31)年4月にNICU(6床)に加えGCU(6床)を新設し、大分県下の高度周産期医療の一翼を担っている。

■CCU部

冠動脈疾患の集中治療を行う部門である。冠動脈疾患以外にも、心筋炎、心筋症、弁膜症などを原因とした難治性心不全の治療、致死性重症不整脈に対する治療も積極的に施行している。

■血液浄化センター

血液浄化センターは2016(平成28)年に7床から15床及び個室2部屋へと増床し、腎臓外科・泌尿器科、腎臓内科、ME機器センター、ICUナースが協力して各種血液浄化を行っている。また、2020(令和2)年からは外来の維持血液透析も開始し、地域医療にも貢献している。

■内視鏡診療部

内視鏡診療部では、年間6,000例を超える上部消化管、下部消化管、小腸、胆・膵、気管支の内視鏡検査・治療を行っている。早期癌の内視鏡的切除、消化管出血や閉塞性黄疸などの緊急内視鏡、超音波内視鏡を用いた特殊手技など多岐にわたる治療を、各専門領域の医師たちが診療している。

■感染制御部

医療の高度化や医療環境の変化に伴い、状況に合わせた精度の高い感染対策に多職種のチームで取り組んでいる。抗菌薬の適正使用の推進による多剤耐性菌の抑制やCOVID-19などの新興感染症への対応では県下で指導的な役割を担っている。

■ME機器センター

臨床工学技士による医療機器管理を行っており、管理台数も年々増加している。また、医療機器の高度化に伴い、臨床工学技士のニーズは高まり、様々な治療で医療機器の操作を行っている。医療機器を通して安全な医療提供に貢献している。

■医療安全管理部

安全で質の高い医療を提供することを目的に、院内で発生したインシデントを分析することで、その再発防止策を立案、周知し、さらにその実施状況を評価している。また県内の医療機関における医療事故調査への協力も行い、医療安全文化の醸成に努めている。

■ 卒後臨床研修センター

医師臨床研修プログラムや研修環境を充実させることを目的に設置され、現在多くの臨床研修医が本院で研鑽を積んでいる。多様化した時代のニーズに合った、理想の臨床研修を実現できるよう、日々奮闘している。

■ 腫瘍センター

腫瘍センターは、化学療法部門、緩和ケアセンター、院内がん登録部門、がん相談支援センター、がんゲノム医療部門などから成り、医師、看護師、薬剤師、その他各種コメディカル職員が協力し、最善のがん診療の提供に努めている。

■ 総合臨床研究センター

総合臨床研究センターは、本院が厚生労働省治験中核病院に選定されたことを背景に、2008（平成20）年4月に開設された。現在では、治験のコーディネーションに留まらず、臨床試験に関する様々な課題について助言するコンサルテーション部門、データセンター部門、モニタリングや監査を担当する品質保証部門、臨床研究専用病床（20床）であるクリニカルトライアルユニット（CTU）等を有した組織となっており、医療分野の研究開発推進に力を尽くしている。

■ 肝疾患相談センター

肝疾患相談センターは2008（平成20）年4月、大分大学医学部附属病院が肝疾患連携拠点病院に指定されたことに伴い設置された。良質な肝炎・肝がん治療が受けられるように、定期的な情報発信や相談に対応している。

■ 臨床栄養管理室

管理栄養士と調理師からなる臨床栄養管理室は栄養療法の専門職として、多くのチーム医療に取り組んでいる。また入院前より患者さんの栄養状態、嚥下機能等を評価し、患者さん一人ひとりに適した栄養、食事管理を行っている。

■ 遺伝子診療室

2014（平成26）年2月に開設した遺伝子診療室は、主に母体血を用いた新型出生前診断を中心に専門診療を開始した。2019（平成31）年4月には専任の認定遺伝カウンセラーを配置し、ゲノ

ム医療に関わる全ての診療科と臨床遺伝専門医が連携する診療体制を整備した。大分県の臨床遺伝部門を牽引する医育機関として、遺伝医療と遺伝教育を推進している。

■ 認知症先端医療推進センター

2015（平成27）年4月に設立された認知症先端医療推進センターは、疾病構造の変化に対応し、認知症疾患等にかかる高度医療・先進医療を推進しており、脳神経内科が中心となりPET診断技術に関する研究や産学官連携による認知症の新規治療法の開発が進められている。

■ 生殖医療センター

生殖医療センターは2021（令和3）年2月に開設された。生殖医療分野において、女性患者のみならず、男性不妊やがん患者の妊孕性温存に対応するため、院内の多様な部署や診療科と連携しつつ、総合的な生殖医療が行える体制づくりを目指している。

■ 看護師特定行為統括センター

質の高い看護師特定行為研修を提供し、また研修修了後に存分に特定行為を行って力を発揮出来る環境を整備する役割を担っている。高度医療や地域医療に貢献できる看護師を1人でも多く育成することを目標に、他の医療機関からも研修受講者を受け入れている。

■ 低侵襲手術センター

医学部附属病院内で年々増加する、ロボット支援手術を中心とした低侵襲手術の①運営の効率化、②医療安全、③高度医療人育成を目的として2022（令和4）年8月、医学附属病院内に低侵襲手術センターを設立した。

■ 肥満・糖尿病先進治療センター

肥満・糖尿病先進治療センターは大分大学のもつ肥満・糖尿病治療の長い歴史を背景にさらに先進するセンターとして2023（令和5）年4月に設置された。センターでは各専門医や医療スタッフが協力して最先端の肥満・糖尿病の内科治療や外科治療を進めている。

■災害マネジメント総合支援センター

本センターは、体制強化を目的に2024（令和6）年4月に災害対策室から組織改編を行い設立された。BCP部門、コーディネート部門、データマネジメント部門で構成され、行政や様々な組織とも連携して院内外の災害対策やBCP等を推し進めている。

■薬剤部

薬剤部では、大学病院の使命である診療・教育・研究を通じて、臨床業務を実践している。病棟薬剤業務やチーム医療、薬剤師外来や処方入力支援など多岐に渡る業務を実施している。さらに、様々な診療科と共同研究を行いエビデンス構築にも力を注いでいる。

■看護部

看護部は、「私たちは、深い関心と確かな技で‘その人らしく生きる’を支える看護を提供します」という理念を掲げている。患者さんの望む療養生活の実現のため、他職種と協働し、地域の看護職と連携している。また、専門分野の資格取得など看護の質向上に資する人材育成に取り組んでいる。

■医療技術部

医療技術部は、臨床検査部門、放射線部門、リハビリ部門、臨床工学・歯科部門の4部門9医療技術専門職で組織されている。職員一人ひとりが各々の専門知識を発揮して日々の臨床業務、患者サービス向上、機器管理、医療安全、研究活動に積極的に取り組んでいる。

■移植・再生医療支援室

移植・再生医療支援室は、移植医療及び再生医療に係る関係機関等との連絡調整、各種手続、患者・ドナー及びその家族への支援、データ管理等の業務を統括するため、2016（平成28）年5月25日に設置された。

■女性医療人キャリア支援センター

本センターは、医療人のワーク・ライフ・バランスや安心して仕事を継続するための支援や復職に向けた取組を行っている。今後も性別や職種に関わりなく医療に携わる人々のライフステージと

キャリアに係る不安や悩みを共有し、適切な情報や制度等の提案を行える場を提供していく。

■看護職キャリア開発支援センター

看護職キャリア開発支援センターは、看護部と看護学科が協力し人的資源の活用や多職種協働による教育プログラム開発、研究支援、地域交流推進など、医療環境の変化に対応できる人材を育てる活動をしている。



1980（昭和55）年竣工時



2024（令和6）年撮影

入院・外患者延べ数

(単位：人)

年 度	外来患者延数	入院患者延数
2008（平成20）	231,024	187,054
2009（平成21）	245,265	187,943
2010（平成22）	246,528	189,336
2011（平成23）	254,327	188,232
2012（平成24）	252,537	183,698
2013（平成25）	249,195	183,173
2014（平成26）	245,222	186,152
2015（平成27）	245,751	185,013
2016（平成28）	245,165	187,301
2017（平成29）	254,225	195,942
2018（平成30）	261,520	198,372
2019（令和元）	263,755	194,463
2020（令和2）	252,553	179,611
2021（令和3）	255,179	175,114
2022（令和4）	254,452	174,783
2023（令和5）	257,277	187,895

手術件数

(単位：件)

年 度	件 数
2008（平成20）	5,110
2009（平成21）	5,279
2010（平成22）	5,361
2011（平成23）	5,247
2012（平成24）	5,172
2013（平成25）	5,381
2014（平成26）	5,293
2015（平成27）	5,523
2016（平成28）	5,448
2017（平成29）	5,617
2018（平成30）	5,904
2019（令和元）	5,910
2020（令和2）	5,547
2021（令和3）	5,830
2022（令和4）	5,952
2023（令和5）	6,464

診療報酬請求額

(単位：千円)

年 度	外 来	入 院	合 計
2008（平成20）	2,696,765	10,552,348	13,249,113
2009（平成21）	3,129,748	11,037,787	14,167,535
2010（平成22）	3,390,657	11,969,184	15,359,842
2011（平成23）	3,641,982	11,866,165	15,508,147
2012（平成24）	3,806,602	12,154,894	15,961,496
2013（平成25）	3,971,846	12,804,860	16,776,705
2014（平成26）	4,125,666	13,230,050	17,355,715
2015（平成27）	4,315,241	13,333,822	17,649,063
2016（平成28）	4,494,324	13,811,597	18,305,922
2017（平成29）	4,684,682	14,728,064	19,412,746
2018（平成30）	4,924,282	15,357,713	20,281,995
2019（令和元）	5,273,384	15,702,935	20,976,318
2020（令和2）	5,587,618	15,594,768	21,182,385
2021（令和3）	5,800,453	15,773,203	21,573,656
2022（令和4）	6,073,326	16,386,532	22,459,858
2023（令和5）	6,715,155	18,008,871	24,724,025

第6節 将来展望

大分大学医学部の前身である大分医科大学は1976（昭和51）年10月に開講し、2026（令和8）年10月に50周年を迎える。これからも地方国立大学における医学部の特色を活かし、「社会のニーズに応え、地域社会とともに歩む県内唯一の医学部を有する医育機関」として、医療・教育・研究・地域貢献・国際化の各分野においてその活躍が期待されている。そのビジョンは、「次世代医療を担う質の高い医療人育成」、「知の拠点としてメディカル・イノベーション推進」、「地域医療の中核的役割の強化」である。Society5.0社会における医学部の未来展望を述べたい。

1. 組織連携による機能強化と学術的融合の推進

少子高齢化の時代を迎え、医学部の内外との連携による機能強化は重要な鍵を握る。具体的には、医学部を構成する3学科（医学科・看護学科・先進医療科学科）の連携、医学部と附属病院の連携、学部間連携、グローバル感染症研究センターや研究マネジメント機構、クライシスマネジメント機構との連携、県行政・地方自治体との連携、医師会・看護協会など各種医療団体との連携、医療機関・介護施設との連携、県内大学・教育機関との連携、企業や金融機関との連携、国内大学・研究機関との連携、海外大学・各種団体との連携、同窓会との連携、そして文科省・厚労省をはじめ政府主導の各種団体との連携の推進である。組織の連携は、単に枠組みだけでなく、研究・教育領域をはじめ枠を超えた新たな学問領域への発展や融合人材の育成を実践したい。

2. サステナブルな運営体制の確立

社会の変化に対応しうる持続可能な財政基盤に基づく運営体制は重要な課題である。外部資金として科研費・AMEDや共同研究・受託研究・治験、自治体や企業からの委託事業はもちろん、知の拠点として開発研究の事業化や知的財産によるライセンス契約の推進、さらには学内の老朽化施設・不動産の再利用には、民間企業のアイデアを取り入れたPFI活用などの改革を進めたい。

3. 教育の革新と人材育成

医学・看護学・先進医療科学の医療現場は急速に進化しており、学生に対する教育も革新が求められている。モデルコアカリキュラムに基づき、国際基準であるJACMEやJABNEなど各認証のバージョンアップとともに、本学の強みであるスキルスラボ・SOLINE・Cadaver Surgical Trainingなど実践的シミュレーション教育の拡充や、AI・VRなどDX活用教育の推進、また現場でしか体験できない滞在型地域医療実習や多職種連携教育の強化も重要である。医学部生の教育に加え、シニア世代やライフイベントによる休職者を対象としたリカレント医療教育も、地域の拠点として大学が担う役割と考える。

4. 研究の推進と国際化

感染症や低侵襲医療など卓越した研究領域の国際的拠点形成とともに、教員全体の研究力向上の両面の推進が重要である。医療の高度化と働き方改革の中で、効率的な研究環境整備として、2024（令和6）年に医学部内に設置したクロス・イノベーションセンター（METIS）に存在するクラウド管理の医療情報データベースと専門的人材チーム、データ解析サポート企業などのフル活用を期待したい。創薬や医療機器開発では、総合臨床研究センター（GCRC）や臨床医工学センターを中心とした連携が鍵を握る。

5. 地域医療への貢献

医師・看護師・保健師・検査技師・臨床工学技士をはじめ、多様な医療人材を育成し、地域の医療・福祉の活性化を目指している。医学科地域枠及び地元出身者枠の特色ある入試制度も大きな役割が期待されている。大分医療ネットワーク構築や医療・介護ヘルスクラウドの推進は、政策提言にも貢献し、遠隔医療技術の開発・運用によって、医療従事者の地域偏在、診療科偏在の解決に繋げたい。

大分大学ビジョン2040に沿って、医学部ではこれからも社会のニーズに応え、地域社会とともに歩み、より良い医療・福祉を提供するために教職員一丸となって努力を続けたい。皆さまには、今後も温かいご支援を心からお願いするとともに、その先にある“Good health and Well-being”を実現する未来をイメージしたい。

大分大学医学部（大分医科大学）の発展を願って

鳥 巢 岳 彦

大分大学医学部 初代医学部長
大分大学名誉教授



同窓会の皆様方の多くは、お健やかに日々の診療に謹んでおられることとお慶び申し上げます。

大分医科大学開学は1978（昭和53）年ですが、文部省で認可されたのはそれより2年早い1976（昭和51）年です。その時、準備室の病院担当副学長予定者の先生より、「手術室の準備も始めている。整形外科は手術器械が高額である。限られた予算であるから。骨折治療に使うネジ回しやノミは日曜大工の店で購入してはどうか？」などの珍提案もありました。懐かしい思い出です。

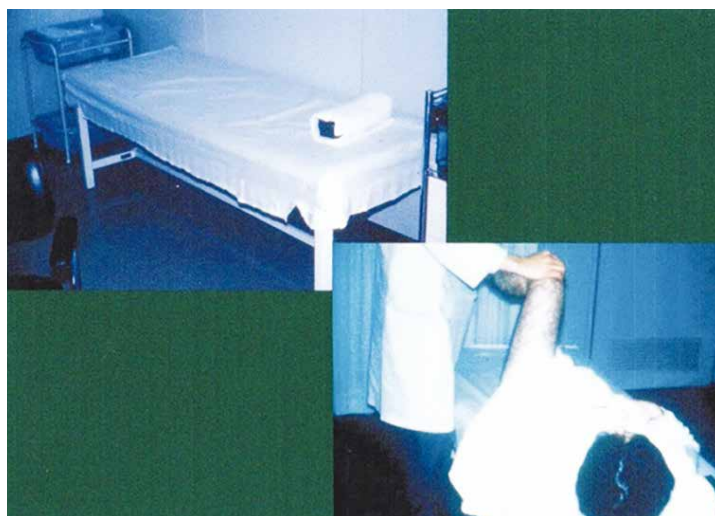
温水プールの中での運動療法は種々の疾患に効果的です。「リハビリテーション室には是非、温水プールの設置を」と懇願した結果、温水プールの設置が決まりました。患者移動用昇降機も取り付けていただきました。同窓会の皆様の中には、学生時代にこのプール内昇降機に乗り、「up-downクイズ」を楽しまれた方もおられるのではないのでしょうか。

初代学長は中塚正行先生です。赴任するにあたり、ご自宅にご挨拶に伺ったところ、「この大学は地域医療に取り組む人材の育成が最も重要である。

即戦力となる医療人の育成に全力で取り組んでほしい」と熱意あふれる訓示をいただきました。

最近の画像診断技術は高度に進歩しました。その読影に精通することは大事ですし、その所見の説明も有り難いのですが、患者さんを触診しない医師が増えた感じがします。スポーツ外傷などの運動器疾患の脊柱や四肢の診察で強調したことは、問診の後、まず立位で姿勢や四肢以上を視診する。診察台は診察室の中央に置く（写真）。必ず局所を触診し異常を確認する。しかも、その触診は健側より始める、などです。

現在、学長である北野正剛教授の多方面での情報発信や強力な指導力に敬意を表するとともに、大分大学の更なる発展を期待致します。



医学部看護学科30周年を祝して

島田 達生

元副学部長・元看護学科長
大分大学名誉教授



大分大学開学から75周年、誠におめでとうございます。大分大学医学部看護学科開学30周年を迎え、心からお慶び申し上げます。主に看護学科の初期の出来事等を書きます。

廊下を歩いていると、「オーイ、島田君、ちょっと」と糸賀学長から声をかけられた。「今度看護学科を作る計画がある。それに加わってくれないか!」と言われた。即座に「ハイ」と答えた。私の信条は「行雲流水」。久留米大学解剖学の助教授であった私に、新設大分医科大学助教授の誘いがあった。条件は悪く、返事は「NO」であったが、恩師野中福次教授から叱責を受け了承した。「行雲流水」の心意気で、物事にこだわらず、なすがままに行動する。さすれば「自ら道は開ける」。しかし、「行雲流水」の裏には、我慢、忍耐、そして努力が必要であると言われた。1995（平成7）年4月、大分医科大学看護学科が誕生した。学長は、高木良三郎先生、専任教授は荻澤さつえ先生（基礎看護学）と島田達生（健康科学）、助教授・助手数名でスタートした。一番忙しい人は事務官稲田君だった。学科棟の壁、廊下、教室の色等々は学科会議で決めた。医学科の木は「ヒポクラテスの木」であり、看護学科の木は「御衣黄桜」で、薄緑の花が咲く。花言葉は「永遠の愛」「優美」「心の平安」です。

学生定員は一学年60名。一期生は全員女性。二期生は男2名、三期生は男1名、四期生は男1名、五期生は男4名。男子は話し相手が少なく、寂しそうだった。そこで、男子学生の会、豊殿会（ほうでんかい）を作った。毎年新入生の歓迎、4年生には送別を九重ひぜん湯の山小屋でバーベキューをやった。看護とは、看護における男子の役割は等々、楽し気にワイワイと騒いだ。私の退職も祝ってくれた。皆やさしい! “豊殿会万歳”

教員の使命は教育、研究、社会貢献である。教育面で学長から“君が看護に入ったからには何か新しい教科を出しなさい”と言われた。人体解剖（見学）実習と顕微鏡観察を組み込んだ。骨格、筋肉、循環・脳・脊髄、末梢神経、胸部内臓、

腹部内臓、骨盤内臓（男性・女性）を剖出したモデル体を作成し、学生達に学ばせた。また、骨、筋肉、神経系、五臓六腑のプレパラートを各100枚作り、顕微鏡観察とした。4年生対象の卒業論文には健康テーマに自ら考え、実行させた。大学院修士課程を作る時が大変だった。資格を有する教授と講義内容に苦勞した。健康科学講座には4人の院生が入った。修士論文として、筋組織におけるリンパの流れ、高血圧下の心筋の構造と機能、痛みと自由神経終末、注射時と日内変動がなされ、学術雑誌にも掲載された。社会貢献面で、小学生を対象に「ミクロに輝き、親子体験学習」を本学、姫島、湯布院、徳之島、中津でやり、「ニワトリの解剖」、「豚心臓の解剖」をO-Laboで行った。看護学科院生達が手伝った。

私は大分医大に赴任してから今日まで、大分出身で、医学界で有名な心臓刺激伝導系の発見者、“田原淳博士”の業績の顕彰を行ってきた。特に「第5回Tawara-Aschoff International Symposium」を中津で開催の時、支えたのは健康科学の学生と卒業生だった。会の前日に田原淳のブロンズ像を中津市役所に設置した。ブロンズ像の作者は大分大学の佐脇健一教授。先生は田原の業績と私の思いに意気を感じて造ってくれた。

定年後、大分市教育委員会の依頼で大分県「世界の心臓を拓いた田原淳の資料集・解説本・普及版」の3冊を作った。

本年3月、私の弟子達が傘寿を祝ってくれた。豊殿会の皆の成長した姿は嬉しく胸が一杯になった。



大分大学75周年を祝して

小 幡 光 子

元医学部看護学科教授



大分大学創立75周年を心よりお祝い申し上げます。

現役を引退して3年余り、年齢とともに記憶も曖昧になりつつある今、当時を振り返る機会を与えていただき感謝いたします。

私と大分大学のかかわりは大学統合2003（平成15）年、それに続く法人化2004（平成16）年から始まりました。医学部看護学科長を務めていたため、管理者として、否応なく「大学改革」の嵐に巻き込まれました。特に、3学部を持つ旧大学と医学部のみではあるが附属病院を持つ単科大学との統合は、それぞれの大学の文化や風土の違いを乗り越えていくプロセスでもあり、非常に厳しい議論が続いたことを覚えています。

「対等合併」を主張し、まだパターンリズムが色濃く残っている理系の医学部の教授陣と文系の論客が揃っている旧大学の教授たちとの議論はなかなかみ合わず、今思えば異文化理解の良い機会でした（笑）。ちなみに女性はそれぞれに一名のみ、（さすがに今は女性が増えていると思いますが…）居心地の悪さはありませんでしたが、出来るだけニュートラルな意見を言おうと意識しました。

法人化の過程では、教育研究評議会委員として人事制度検討委員会、中期目標・計画策定、大学評価・教育評価、自己点検評価委員会など多くの委員会にかかわりデスクワークに追われました。その上、会議のため挟間キャンパスから旦野原キャンパスまで週数回も往復するのは結構負担で、気分が滅入ることもありました。

一方で、経済学部二宮孝富委員長のもと「イコールパートナーシップ委員会」を立ち上げていく過程に参加し大きな学びを得ることができました。ハラスメントの問題をジェンダーや男女共同参画など幅広い視点で捉え、議論を深められたことは、今日のLGBTQの理解にもつながっています。

また、学生生活支援委員会では、医学部だけで

なく、他学部の「今どきの」学生や学生寮の問題に関わり、彼らの抱えている困難や生活・経済状況などの実態を知り、大学として、授業だけではなく、青年期の若者の成長過程を支援していく様々な仕組みの必要性を再認識することになりました。

大学の統合・法人化という大きな変革期に、大学の管理・運営にかかわり色々な役割を担った経験は組織運営の難しさを実感させるものでしたが、組織を動かすためには、将来へのビジョン、戦略、戦術を持つことがいかに重要かを学び、その後の私のキャリアに活かすことができました。

現在、世界は混沌の中にあり、日本も斜陽化する経済、人口減少、少子化など課題は山積しており、成長なき時代のビジョンを模索中です。

法人化は大学にとって大きな転機でした。国の一機関としての「運営」から法人としての「経営」への転換は大学運営の裁量権と自由化をもたらすと同時に、競争と成果主義による大学評価により運営交付金の配分に格差が生じ、多くの大学が財政難の「経営」に苦闘しています。しかし今こそ、将来を構想し、どこでも貢献できる人材育成は急務であり、大学の役割は重要です！

【大分大学ビジョン2040】は『持続可能で多様性あふれる社会を創生する人材を育てるための開かれた学びの創造』という明確なビジョンを提示しています。この道を一步ずつ着実に進めていかれることを期待しています。

看護学科も創設30周年を迎えました。卒業生たちが様々な場所で活躍しており頼もしい限りです。

教員と学生が一丸となり、これからも大分大学が誰もが自由に学び研究できる場となることを心から願っています。

第8節 医学部卒業生の回顧談

医学部医学科同窓会「玉樹会」の活動について

高 倉 健

大分医科大学 第1期生
医学部医学科同窓会「玉樹会」第7代会長

国の1県1医科大学（1医学部）構想に基づき1976（昭和51）年10月1日に開学しました大分医科大学は2003（平成15）年10月に大分大学と統合されて大分大学医学部となりました。医学部には2024（令和6）年現在医学科と看護学科と先進医療科学科の3つの学科がありますが、先進医療科学科はまだ卒業生が出ていませんので同窓会は結成されていません。医学科は第1期生が卒業してまもなく同窓会設立の話が持ち上がり3年目の1986（昭和61）年に第1回同窓会発足を開催して、翌年の教授会で承認されました。1994（平成6）年の総会で卒業アルバムの題字「玉樹」にちなんで同窓会名が「玉樹会」（ぎょくじゅかい）と命名されました。

「玉樹会」の会長は初代が河野義久（第1期生）、第2代は高倉健（第1期生）、第3代は西園晃（第2期生）、第4代は植山茂宏（第2期生）、第5代は高井教行（第8期生）、第6代は河野義久（第1期生）、第7代は高倉健（第1期生）で現在に至っております。玉樹会会則には、「会員相互の親睦を図り、会員の福利厚生、学術の発展及び母校の発展に尽くすことを目的とする」と謳っており、その目的のため種々の事業を計画・実行中です。総会は毎年8月に開催しています。2020（令和2）年国内で新型コロナウイルス感染症が流行するまでは会場を大学構内と大分市内のホテルでの交互開催にしてホテル開催時には総会に引き続いて特別講演会を行っていました。私が会長に着任したのが2016（平成28）年10月でそれ以降に特別講演をしていただいたのは2018（平成30）年に大分大学医学部神経生理学講座教授 花田礼子先生（第11期生）から「生理機能解析の新たな展開」と翌年のラグビーワールドカップの開催に合わせて日本ラグビーフットボール協会医務委員 山田睦雄先生から「World Rugbyが求めるPitch Side Medical Standardについて」でした。しかしコロナ禍の2020（令和2）年と2021（令和3）年は大学構内で総会のみでした。2022（令和4）

年からは大学構内とZoomでのオンラインのハイブリッド形式として現地に来にくい同窓生にも参加しやすいように取り組み、総会に引き続いての特別講演会では2022（令和4）年は神戸大学医学部形成外科教授 寺師浩人先生（第3期生）から「大分で得たもの 神戸で返すもの」、2023（令和5）年は宮崎大学医学部付属病院院長兼整形外科教授 帖佐悦男先生（第1期生）から「出会いを夢を育む！ー約50年前に皆さんと出会ってー」、2024（令和6）年は大阪ベルランド総合病院呼吸器外科部長 岡部和倫先生（第2期生）から「ハーバード大学での特別講演ーアメリカ医師試験対策を含めてー」と毎年ご講演をいただくようになりました。

また「玉樹会」から学生への支援事業としては、●新入生歓迎会の主催（1年生）●医学部祭●研究室配属成績優秀者の表彰（4年生）●5年生と各医局との交流会（5年生）●フィリピン・サンラザロ病院研修（6年生）●医師国家試験対策（6年生）●西医体上位入賞者の表彰（1～6年生）●文科系サークルの西日本大会（1～6年生）●USMLE合格者への援助（6年生）●卒業生が勤務する医療施設での見学及び研修のお世話などを行っています。看護師の戴帽式にあたる医学生への白衣授与式では毎年同窓会長が特別講演をしています。さらに大分県外での同窓生の交流を深めるために支部会の設立を促しており2024（令和6）年までに熊本県 神奈川県 長崎県 北九州市 兵庫県 広島県（開設順）で開設され2024（令和6）年10月には神奈川県支部会が拡大して首都圏支部会となりました。

医学部は2026（令和8）年10月に開学50周年を迎えます。玉樹会も母校のさらなる発展のために尽力して参りますので、今後とも皆様からのご指導ご鞭撻ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。結びに75周年を迎えた大分大学の益々のご発展を心から祈念申し上げます。

患者さんの心を心とする玉樹たれ！ そしてアルメイダの意志を継げ！ 大分医科大学黎明期の話と 玉樹会の心意気

河野 義久

大分医科大学 第1期生
河野脳神経外科病院 院長



1978（戊午の年）年4月12日大分医科大学第1回入学式が現解剖学実習室で挙行政され、全国から精鋭100名の仲間が集いました。加藤博文先生（現かとう耳鼻咽喉科クリニック院長）の宣誓の後、初代学長中塚正行先生は、「君たちは、患者の心を心とする医師を目指せ」と訓示されました。現在は、患者さん第一主義を基本理念とする病院が多くありますが、「患者さんの心を心とする医師」は、大分医大卒業生の共通の「医師としての理念、理想像」として今も受け継がれ問い続けられています。私は、1995（平成7）年12月に開業し病院の基本理念に、「患者さんの心を心とする最高、最良、善意の医療を行う」を掲げました。そして、2019（令和元）年ろ胞性リンパ腫に罹患し大分県立病院血液内科に1週間入院、1年半の外来化学療法を受け、患者になって初めてわかる患者さんの心を体験しました。そして私も病氣と闘っているのだから一緒に頑張ろうと本気で患者さんに言えるようになりました。

大分大学医学部同窓会玉樹会の「玉樹」は初代副学長林良二先生が、卒業アルバムの題字として掲げられたものです。中国の故事、世説新語、晋書、謝玄伝に由来し、無限の可能性をもった美しい樹の喩え、優れて高潔な人の喩えであります。「世説新語」は、中国の南北朝時代に書かれた著名な説話集で、魏晉南北朝時代の知識人や貴族の生活、思想、風習が記されています。「晋書」は中国の晋（西晋・東晋）時代の歴史書で、「謝玄伝」はその中で、東晋の名将である謝玄（しゃげん）の生涯や功績について詳述された伝記です。謝玄はその軍事的才能だけでなく、人格的にも優れ、部下たちからの信頼も厚く、知識人として文化的にも優れており、正に「玉樹」として評価されていました。

豊後国風土記に、近くに柚富郷（ゆふのさと）があるので、柚富の峰の名がついたとされる姿勢が美しい「豊後富士由布山」と、かつて山の頂上

付近に鶴が飛来することが多かったためとされる「おんせん県大分府の泉源鶴見山」、いずれも龍神伝説があり霊験あらたかな山々を望む麓野田山に我が大分医科大学はあります。林先生（医大祭のイベントは勉強に支障になると悉く否定されました）が、大分医大校舎4階の窓から由布、鶴見を眺め、我々卒業生に託された「玉樹」への思いに心から感謝し、今でも「遊ばんで勉強しなさい！」と言われているようで身が引き締まる思いです。

1979（昭和54）年第2回お山の上の医大祭で、大分市の遊歩公園のアルメイダ像から大分郡挾間町大分医科大学キャンパスまでのリレーマラソンを企画しました。衣装をどこから調達したかは覚えていませんが、私はルイス・ド・アルメイダに扮し「我はアルメイダなり、遠くポルトガルから西洋医学を、日本で初めてこの府内に伝え、数多くの病める者達を救った。汝ら大分医科大学生は、私の意志を継げ！」と宣誓しました。野球部、サッカー部、バドミントン部等サークル協議会のメンバーが、タスキをつなぎ10kmの距離を駆け抜けました。これは伝統行事としたかったのですが、警察への届け出など大変なことが多く1回で終わってしまった事が心残りです。

2024（令和6）年9月22日第7回戊午の会（大分医大1期入学生会）がオアシスタワーホテルで行われ、前述の仲間が39名集まりました。現役合格者が来年3月には定年を迎える年となりました。恒例の3分間スピーチで、それぞれの近況報告が行われ、大分の地で、また日本全国で医学教育、地域医療に貢献してきた玉樹の仲間を誇らしく思いました。開業したクリニックを譲り、週2回パート勤務をしていると言う金田幸枝先生の、院長の責務を離れると、肩の力が抜けて患者さんの心に寄り添うことが出来ているという言葉が印象に残りました。「患者さんの心を心とする」第3ステージが待っていると感じました。

大分大学75周年に寄せて 学生時代の思い出や現在

廣 田 美 咲

2009(平成21)年 医学部看護学科 卒業
医学部看護学科同窓会「桜樹会」会長



平素より同窓会活動にご理解・ご協力いただき、心より感謝申し上げます。2022（令和4）年より医学部看護学科同窓会「桜樹会」会長に就任させていただきました廣田美咲です。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、大分大学75周年、誠におめでとうございます。私は55周年の年に大分大学に入学しましたが、自分が大学生だった頃のことがすぐに思い出せるのに、もうそんなに月日が経過していることに驚きを隠せません。

私は12期生として医学部看護学科に入学し、とても賑やかで愉快的仲間たちとともに、4年間の大学生活を過ごしました。当時は学業と同時にアルバイトにも大いに励み、長期休暇の度に旅行に出掛け、とにかくオンとオフをきっちり分けた過ごし方をしていました。この習慣は現在も続いており、私のライフワークバランスの大きな支えになっています。

学生生活で特に思い出されるのは、実習と国家試験です。実習では受け持ちの患者さんにも恵まれ、患者さん自身や疾患のことについてよくお話してくださる方が多く、患者さんに関わることは学びの多い時間でした。一日の終わりにするアセスメントや計画表の作成は、当時は自分のアセスメント力のなさにげんなりしながらも、仲間に支えられ乗り越えられたと同時に、あの学生生活があったからこそ、今の自分の看護につながっているんだと実感しています。国家試験期間中は、授業のない期間もずっと大学で勉強に明け暮れ、朝から晩まで仲間と問題を出しあったり、覚えやすい語呂合わせを考えたりしながら過ごしました。今でも当時の仲間と会えば、あの頃は大変だったけど楽しかったねと、何度も笑い合えるほどいい思い出です。

また、回数はそこまで多くなかったのですが、旦野原キャンパスで授業を受けたこともいい思い出です。看護学科はあまり選択授業がなく、ほと

んどが必修科目だったので、他学部の学生と同じ授業を受講する体験はとても貴重でした。挾間キャンパスでの授業の日はお弁当を持参したりしていましたが、旦野原キャンパスでの授業の日、仲のいい友達と打ち合わせて学食で食べるのも楽しみにしていました。もともと大分県出身なので、他学部に通う旧友に会って話せるのも新鮮に感じていたのを覚えています。

私は卒業後、今現在も所属している大分大学医学部附属病院に就職しました。病棟や外来を経験しながら、結婚・出産を経て、現在は3人の子どもを育てながらフルタイム勤務をしています。毎日があっという間に過ぎていますが、健康な身体で看護を行えることに大きな喜びを感じると共に、支えてくれる同僚や上司、家族に感謝の気持ちでいっぱいです。

附属病院で勤務をしていると、当たり前なのですが、自分の母校に通う現役学生さんが実習に来てくれます。今はナース服も各自が数種類から選べるようになっていたり、領域の科目名が変わっていたりと様々な変化を感じています。しかし、いつ実習生の受け入れをしても思うのは、看護の楽しさをずっと感じていてほしいということです。自分が学生だった頃の姿と重ねながら、現在の看護人材の未来が常に明るいものでありますようにと、願ってはやみません。私自身も同窓生の先輩として、そんな姿を見せられるお手本となれるよう、頑張っていきたいと思っています。

最後になりますが、我々桜樹会は2025（令和7）年に創立25周年を迎えます。大分大学75周年には遠く及びませんが、これからも同じように歩みを進めていけるよう活動を続けてまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

今後も、母校大分大学のますますのご発展をお祈り申し上げます。